

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 204

中町 B 遺跡

一般国道429号特殊改良1種に伴う発掘調査

2007

岡山県教育委員会

序

中町B遺跡が所在する美作市大原地域（旧大原町）は、剣聖宮本武蔵生誕の地として知られています。この大原地域は、古代の因幡道から現在の智頭急行や国土交通省によって建設される中国横断自動車道姫路鳥取線（鳥取自動車道）が示しているとおおり、山陽と山陰を結ぶ交通の要衝となっている地でもあります。

このたび、一般国道429号と中国横断自動車道姫路鳥取線（鳥取自動車道）を結ぶ道路を、一般国道429号特殊改良1種として建設するため、路線内の周知の遺跡である中町B遺跡についての取り扱いを協議してまいりましたが、保存することが困難であるとの結論に達し、やむを得ず記録保存のための発掘調査を実施することになりました。

今回発掘調査を行った中町B遺跡は、当センターが中国横断自動車道姫路鳥取線（鳥取自動車道）関連で発掘調査を行った中町B遺跡の北東側に位置し、その時に検出された古代の因幡道と想定される道路遺構の続きが確認されました。

また、この道路遺構と直交する柱穴列も検出され、古代の道路遺構を解明するための重要な遺跡となりました。

これらの調査成果を収載したこの報告書が文化財の保護・保存に活用されるとともに、地域の歴史研究の一助となれば幸いです。

発掘調査の実施及び報告書の作成にあたりましては、地元住民の皆様をはじめ、岡山県美作県民局、美作市教育委員会からは多大な御助力を賜りました。記して深甚なる謝意を表する次第です。

平成19年2月

岡山県古代吉備文化財センター

所長 松本和男

例 言

- 1 本書は、一般国道429号特殊改良1種に伴い、岡山県教育委員会が岡山県美作県民局建設部の依頼を受け、岡山県古代吉備文化財センターが発掘調査を実施した中町B遺跡^{なかもち}の調査報告書である。
- 2 遺跡は、美作市中町53-1ほかに所在する。
- 3 確認調査は平成16年6月22日～6月25日に岡山県古代吉備文化財センター職員大橋雅也が、発掘調査は平成17年4月1日～5月31日に同職員岡本寛久・小嶋善邦が担当して実施した。各調査面積は確認調査が80㎡、発掘調査が632㎡である。
- 4 本書の作成は平成17年7～8月に実施し、小嶋が担当した。
- 5 本書の執筆は、第1章第1節を岡山県教育委員会文化財課職員平井泰男、第1章第2節を大橋雅也、その他を小嶋が担当し、全体の編集は小嶋が行った。
- 6 本報告書に係る遺物のうち、石器石材鑑定については岡山大学理学部 鈴木茂之氏に、道路遺構の側溝の花粉分析及び放射性炭素年代測定はパリノ・サーヴェイ株式会社に依頼した。記して厚くお礼申し上げる。
- 7 遺構写真については調査担当者が撮影し、遺物写真については江尻泰幸氏の協力と援助を得た。
- 8 本書に関連する出土遺物及び図面・写真・マイクロフィルム等は、岡山県古代吉備文化財センター（岡山市西花尻1325-3）に保管している。

凡 例

- 1 本報告書に使用した高度値は海拔高であり、方位は平面直角座標第V系の座標北である。また、遺構配置図等の座標値及び抄録に記載した経緯度は、世界測地系に準拠している。遺跡付近の磁北は西偏7°14′を測る。
- 2 本報告書の遺構ならびに遺物実測図の縮尺率は次のとおり統一しているが、例外については縮尺率を図示または明記している。
土壌：1/30 柱穴列：1/60
土器・陶磁器：1/4 金属器：1/3 木器：1/4 石器・石製品：1/3・1/2 土製品：1/3
- 3 遺構番号は、全体にわたって遺構の種類ごとに1から通し番号を付した。
- 4 遺物番号のうち土器・陶磁器についてはそのまま番号だけを付け、金属器にはM、木器にはW、石器・石製品にはS、土製品にはCを番号の前に付けている。なお、遺物番号は各種類ごとに通し番号とした。
- 5 土器実測図のうち中軸線の左右に白抜きのあるものは、小破片のために口径の推定が困難なものである。
- 6 一覧表における遺物の色調は、『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色標監修）に準拠している。そのほか、本文中の土層の色調は調査担当者の記述による。
- 7 本報告書第1・4図に掲載した地図は、国土地理院発行1/50,000地形図の「佐用」及び国土地理院発行1/25,000地形図の「古町」を複製し、加筆したものである。
- 8 本報告書の時代・時期区分は一般的な政治史区分に準拠し、それを補うために世紀などを併用している。

目 次

序
例言
凡例
目次

第1章 発掘調査及び報告書作成の経緯と経過	1
第1節 調査にいたる経緯	1
第2節 確認調査の概要	2
第3節 発掘調査の経過	2
第4節 発掘調査及び報告書作成の体制	3
第5節 日誌抄	3
第6節 報告書作成の経過	4
第2章 遺跡をとりまく環境	5
第3章 調査の概要	9
第1節 調査区の概要	9
第2節 検出された遺構と遺物	12
第3節 小結	18
自然科学的分野の研究	
中町B遺跡の自然科学分析 パリノ・サーヴェイ株式会社	19

遺物一覧（観察）表

写真図版

報告書抄録

図 目 次

第1図 遺跡位置図 (1/50,000)	1	第7図 調査区北壁断面図 (1/100)	11
第2図 調査地位置図 (1/5,000)	1	第8図 調査区中央南北断面図 (1/100)	11
第3図 確認調査トレンチ配置図 (1/400) 及びトレンチ断面図 (1/80)	2	第9図 側溝1出土遺物 (1/4)	12
第4図 中町B遺跡と周辺遺跡分布図 (1/25,000)	7	第10図 側溝1～3断面図 (1/60)	12
第5図 調査地配置図 (1/400)	9	第11図 側溝2北壁側断面図 (1/30)	13
第6図 遺構配置図 (1/200)	10	第12図 柱穴列1・2 (1/60)	14
		第13図 土壙1 (1/30)	14
		第14図 溝1 (1/80)	15

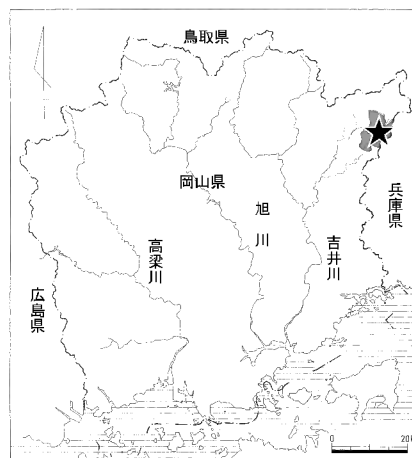
第15図	包含層出土遺物<弥生土器・土師器・須恵器> (1/4)	15	第18図	包含層出土遺物<備前焼> (1/4)	17
第16図	包含層出土遺物<勝間田焼・東播系須恵器> (1/4)	16	第19図	包含層出土遺物<金属器・土製品・木製品・石器> (1/4・1/3・1/2)	17
第17図	包含層出土遺物<土師器・輸入磁器・瓦質土器> (1/4)	16			

表 目 次

第1表	埋蔵文化財発掘の通知 (法第57条3)	第4表	埋蔵文化財発見通知 (法第59条)
第2表	埋蔵文化財発掘調査の報告	第5表	埋蔵文化財発見通知 (法第100条)
第3表	埋蔵文化財発掘調査の報告 (法第99条)		

図 版 目 次

図版 1	2 側溝 2 北壁側断面 (南東から)
1 確認調査トレンチ全景 (北西から)	3 側溝 2 中央部断面 (南東から)
2 トレンチ 1 (南西から)	図版 4
3 トレンチ 2 (北西から)	1 側溝 1・3 中央部断面 (南東から)
図版 2	2 調査区北壁断面 (南から)
1 調査前風景 (北西から)	3 調査区南北断面 (東から)
2 調査区全景 (北西から)	図版 5
3 調査区全景 (南東から)	包含層出土遺物①
図版 3	図版 6
1 柱穴列 1・2 (北東から)	包含層出土遺物②



遺跡位置図 (1/2,000,000)

アミフセ：旧大原町域

第1章 発掘調査及び報告書作成の経緯と経過

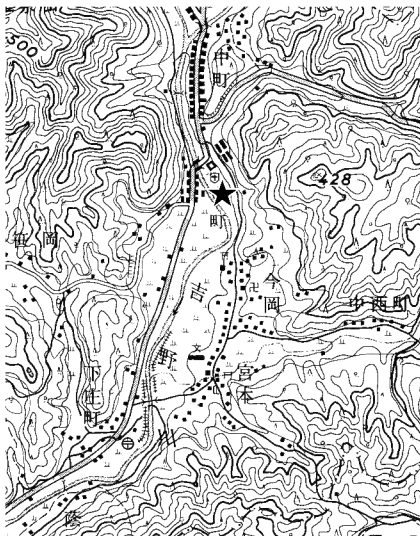
第1節 調査にいたる経緯

岡山県は、美作市中町（旧大原町中町）に位置する一般国道429号と国土交通省によって新たに建設される中国横断自動車道姫路鳥取線（鳥取自動車道）を結ぶ道路を、一般国道429号特殊改良1種事業として平成15年度までにその一部を着工していたが、この道路建設予定地には遺跡は周知されていなかったため、岡山県教育委員会は事前の協議は行わなかった。

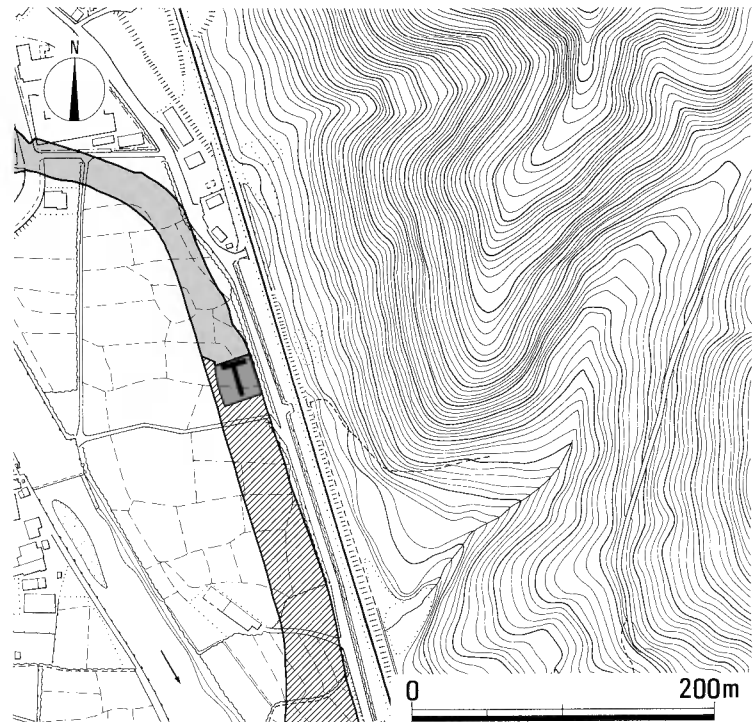
ところが平成15年度になって、南に隣接する中国横断自動車道姫路鳥取線建設予定地の確認調査を実施したところ、中世を中心とする遺跡がこの一般国道改良事業予定地南端部の工事未着手部分にまで広がっている可能性が考えられたため、岡山県教育委員会文化財課は、事業者である当時の岡山県勝英地方振興局建設部と遺跡の取り扱いについて協議を行った結果、工事未着手部分について平成16年度に確認調査を実施し、保護・保存のための基礎資料を得ることとした。

確認調査は平成16年6月に岡山県古代吉備文化財センターが実施し、鎌倉～室町時代を中心とする遺構・遺物が確認された。

文化財課は、この確認調査結果を受けて再度事業者と協議した結果、事業者が平成16年12月15日付で文化財保護法第57条3に基づく発掘通知を提出するとともに、岡山県教育委員会は、同年12月28日付文書で事業者に対し工事未着手部分についての発掘調査を指示し、平成17年度に本調査を実施することとなった。



第1図 遺跡位置図 (1/50,000)



第2図 調査地位置図 (1/5,000)

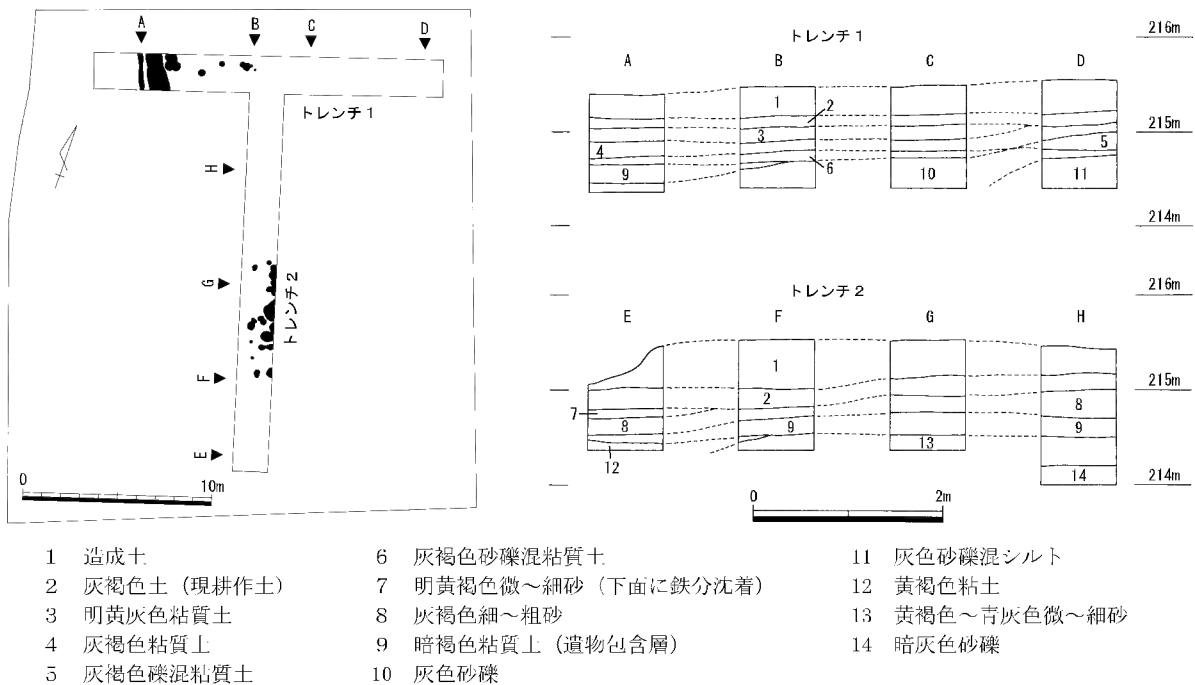
 調査範囲	 429号特殊改良1種用地
 確認調査範囲	 鳥取自動車道用地

第2節 確認調査の概要

確認調査は、平成16年6月22日～6月25日にかけて行った。第3図に示すように工事予定範囲内に幅2mのトレンチをT字形に設定し、遺構検出を行った。調査面積は80㎡である。

調査の結果、標高214.5m付近で基盤層を確認し、この上位に遺物を包含する暗茶褐色土層を認められた。この層に含まれる遺物は鎌倉～室町時代のものである。また、基盤層上面で、溝、不整形な土壇、柱穴を検出した。なお、中国横断自動車道姫路鳥取線建設に伴い隣接地の発掘調査を行っており、この調査で確認された古代因幡道の側溝の一部をT1の西端部分で検出した。

以上の所見から、工事予定範囲には、鎌倉～室町時代を中心とする時期の集落が広がっていると考えた。また、古代因幡道もこの範囲まで延びていることが確認された。



第3図 確認調査トレンチ配置図（1/400）及びトレンチ断面図（1/80）

第3節 発掘調査の経過

全面調査は平成17年4・5月に行った。最初に重機で水田耕作土等を除去したものの、遺構検出面まで約60cmもの厚さがある包含層の掘削に時間がかかり調査は難航したが、5月の末には遺跡の全景写真の撮影や遺構の実測を行い、5月31日をもって調査は終了した。遺構は調査区に隣接する「中国横断自動車道姫路鳥取線（鳥取自動車道）建設に伴う発掘調査」（以下鳥取自動車道関連発掘調査）で調査を行った中町B遺跡で検出された道路遺構の続きのほかに、道路遺構に直交する柱穴列などを検出した。遺物は弥生時代から近世にかけての土器や木器など多数出土した。

なお自然科学的分野の研究として、道路遺構が機能していた時期の周辺の植生環境と遺構検出面の

形成年代等を調べるために、道路遺構の東側側溝内の土壌及び有機物のサンプリングを行い、花粉分析及び放射性炭素年代測定をパリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。

第4節 発掘調査及び報告書作成の体制

平成16年度（2004年度）	平成17年度（2005年度）
岡山県教育委員会	岡山県教育委員会
教 育 長 宮野 正司	教 育 長 宮野 正司
岡山県教育庁	岡山県教育庁
教 育 次 長 釜瀬 司	教 育 次 長 釜瀬 司
文化財課	文化財課
課 長 芦田 和正	課 長 芦田 和正
参 事 田村 啓介	参 事 田村 啓介
総括副参事（埋蔵文化財班長） 平井 泰男	総括副参事（埋蔵文化財班長） 平井 泰男
主 任 小林 利晴	主 任 小林 利晴
主 事 秋山 良樹	主 事 金出地敬一
岡山県古代吉備文化財センター	岡山県古代吉備文化財センター
所 長 正岡 睦夫	所 長 松本 和男
次 長（総務課長） 内田 猛	次 長（総務課長） 内田 猛
参 事 松本 和男	参 事 平松 郁男
参 事 伊藤 晃	参 事 高畑 知功
〈総務課〉	〈総務課〉
総括副参事（総務班長） 笏本 弘忠	総括副参事（総務班長） 若林 一憲
主 任 小坂 文男	主 任 小川 紀久
主 任 小川 紀久	〈調査第二課〉
〈調査第一課〉	課 長 島崎 東
課 長 岡田 博	総括副参事（第二班長） 岡本 寛久
総括副参事（第一班長） 光永 真一	（調査担当）
主 任 大橋 雅也	主 任 小嶋 善邦
（確認調査担当）	（調査・報告書担当）

第5節 日誌抄

- 平成16年 6月22日（火） 発掘資材搬入。重機による掘り下げ。
 6月23日（水） T1 写真撮影。図面作成。
 6月24日（木） T2 写真撮影。図面作成。発掘資材搬出。
 6月25日（金） 重機による埋め戻し終了。
 平成17年 4月11日（月） 発掘資材搬入。重機による表土掘削。

中町B遺跡

- 4月12日（火） 発掘条件整備。
- 4月13日（水） 耕作土掘り下げ。
- 4月22日（金） 調査区東側掘り下げ。
- 5月9日（月） 調査区西側掘り下げ。
- 5月13日（金） 調査区東側遺構掘り下げ。
- 5月25日（水） 調査区西側遺構掘り下げ。
- 5月31日（金） 調査区全景写真。発掘資材搬出準備。調査終了。
- 7月1日（金） 報告書作成作業開始。
- 8月31日（水） 報告書作成作業終了。

文化財保護法等に基づく提出書類一覧

第1表 埋蔵文化財発掘の通知（法第57条3）

番号	岡山県文書番号 日付	種類及び 名称	所在地	面積 (㎡)	目的	届出者	期間	主な指示事項
1	教文埋 第1102号 H16.12.28	集落跡 中町B遺跡	英田郡大原町中町 53-1ほか	700	道路	勝英地方振興局 局長 三宅健	H17.8.1～ H17.12.31	発掘調査

第2表 埋蔵文化財発掘調査の報告

番号	文書番号 日付	周知・ 周知外	種類及び名称	所在地	面積 (㎡)	原因	包蔵地 の有無	報告者	担当者	期間
1	岡吉調 第108号 H16.7.1	周知	集落跡 中町B遺跡	英田郡大原町中町 53-1ほか	80	道路	有	岡山県古代吉備文化財センター所長	大橋雅也	H16.6.22～ H16.6.25

第3表 埋蔵文化財発掘調査の報告（法第99条）

番号	文書番号 日付	種類及び名称	所在地	面積 (㎡)	原因	報告者	担当者	期間
1	岡吉調 第42号 H17.4.12	集落跡・その他 の遺跡 中町B遺跡	美作市中町53-1ほか	700	道路	岡山県古代吉備文化財センター所長	岡本寛久・ 小嶋善邦	H17.4.11～ H17.5.31

第4表 埋蔵文化財発見通知（法第59条）

番号	岡山県文書番号 日付	物件名	出土地	出土年月日	発見者	土地所有者	現保管場所
1	教文埋 第373号 H16.7.1	須恵器・土師器 1箱	英田郡大原町中町 53-1ほか 中町B遺跡	H16.6.22～ H16.6.25	岡山県教育委員会 教育長 宮野正司	岡山県知事 石井正弘	岡山県古代吉備文化財センター

第5表 埋蔵文化財発見通知（法第100条）

番号	岡山県文書番号 日付	物件名	出土地	出土年月日	発見者	土地所有者	現保管場所
1	教文埋 第273号 H17.6.2	土器3箱・木器 1箱	美作市中町53-1 ほか 中町B遺跡	H17.4.11～ H17.5.31	岡山県教育委員会 教育長 宮野正司	岡山県知事 石井正弘	岡山県古代吉備文化財センター

第6節 報告書作成の経過

報告書作成は平成17年7・8月に行った。最初に調査終了後未整理であった土器の洗浄・注記から始め、終了後土器の復元・実測・写真撮影を行い、併せて遺構の下図作成や遺構・遺物の浄書を行った。掲載した遺構・遺物は、道路遺構や柱穴列と土器51点、木器2点、金属器3点、石器・石製品2点、土製品4点である。

第2章 遺跡をとりまく環境

岡山県美作市の大原地域（旧大原町）は、岡山県の北東端部に位置し、東は県境を挟んで兵庫県佐用郡佐用町に接し、北接する西粟倉村を介して鳥取県境にも近距離にある。また、中国山地脊梁部の南に位置することから、旧大原町域には標高724.2mのツズラ山、標高583.6mの瀧山以下、300～500m級の山々が連なり、面積の約55万㎡のうち実に75%が山林によって占められている。

吉井川水系の北東部を構成する最大の支流である吉野川は、英田郡西粟倉村^{おおがや}大茅の北東に所在する岡山と鳥取の県境の若杉峠に源を発し、美作市内を南南西に流れて赤磐市^{すさい}周匝で吉井川に合流する。この吉野川は、旧大原町の山塊を東西に分断するように下庄町までほぼ直線的に南下し、そこで緩やかに湾曲して旧作東町に流入する。樹枝状に展開する谷間からは、黒谷川・後山川・宮本川・川上川・大滝川など小河川が奔流し、吉野川へと注ぎ込んでいる。

旧大原町の平野部は、これらの中小河川沿いに形成された谷底平野を主体とし、地形に制約されて狭長なものが多いなかで、吉野川流域には胃袋状を呈するやや広い平野が散在的に認められる。特に中心部の古町から中町にかけての周辺と今岡から下庄町の地域には、吉野川を挟んでそれぞれ長さ1km・幅500mほどの平野が形成されており、吉野川流域の中でも比較的まとまった小盆地状の地形をなしている。下流域の大石から^{みぶ}壬生を経て川戸に至る地域にも、吉野川沿いに細い平野が展開するが、急峻な山塊が近くにせまり、吉野川流域のだけの狭長な平野となっている。

以下、旧大原町の歴史と遺跡について時代順に簡略にまとめることとする。

現在のところ、旧石器時代の遺跡や遺物は確認されていない。現状では尾崎遺跡⁽¹⁾から出土した、縄文時代草創期の神子柴型石斧が最古の遺物である。次に古い遺物は、鳥取自動車道関連発掘調査で調査を行った、中町B遺跡⁽²⁾の縄文時代前期初頭の羽鳥下層式の特徴が認められる土器が挙げられる。縄文時代後期の遺物は中町B遺跡⁽³⁾や尾崎遺跡⁽⁴⁾、縄文時代晩期の遺物は川戸古墳群⁽⁵⁾や今岡廃寺⁽⁶⁾から出土している。

弥生時代については、旧大原町内で20数か所の遺物散布地が確認されている。現在のところ前期の遺構や遺物は発見されていない。発掘調査で集落の存在が明らかになったのは、鳥取自動車道関連発掘調査での今岡中山遺跡⁽⁷⁾と中町B遺跡⁽⁸⁾が初めてであり、その他に遺構は確認されていないが川戸古墳群や池が平遺跡⁽⁹⁾で遺物が出土している。

古墳時代の集落は、尾崎遺跡で竪穴住居が1軒確認されているものの集落の様相としては現在のところ不明である。墳墓である古墳は旧大原町内で約80基発見されている。前～中期古墳としては、箱式石棺を埋葬施設とする山の後2号墳⁽¹⁰⁾、山頂に立地して墳丘が低平な赤田古墳群・桂坪古墳群などがある。このうち桂坪12号墳は、全長32mを測る前方後円墳で、当該期の首長墳と考えられる。後期古墳は40基ほど確認されており、その多くは直径10mほどの小規模な円墳である。そのうち特筆されるものが、発掘調査が実施された川戸古墳群である。特に2号墳は6世紀末～7世紀初頭に築造された全長12.3mの横穴式石室の大型方墳で、金銅装馬具一式や銀象蕨鏝の大刀など秀逸な副葬品⁽¹¹⁾が出土している。また、この地域の後期古墳の特色として、美作で盛行する陶棺が分布するとともに、播磨の影響を受けた組合式石棺が存在することである。野形2号墳から出土した7世紀前葉の陶棺が

東京国立博物館に所蔵され⁽¹²⁾、釜の口1号墳⁽¹³⁾や築出し古墳⁽¹⁴⁾でその石棺が採用されていることが挙げられる。

7世紀後半の白鳳時代に吉備は分割され、後の英田郡の前身となる英多郡（評）⁽¹⁵⁾が成立する。この時期には、英多郡には北から今岡廃寺・大海廃寺・榎原廃寺・江見廃寺・竹田廃寺・土居廃寺が次々に建立される。地方において一郡に6寺が建立される例は全国的にも珍しく、この地域が畿内中央政権と密接なつながりを有していたことの証左となっている。発掘調査が実施されたものとしては、旧作東町山手に所在する大海廃寺があり、7世紀後半に創建された英多郡最古の寺院であることが判明している⁽¹⁶⁾。

奈良時代初頭の和銅6年（713年）には、備前国から英多郡ほか6郡が割かれて美作国が新しく誕生する。旧大原町域は、北から英多郡大原郷・讚甘郷・大野郷・吉野郷・粟井郷に比定される。発掘調査が実施された今岡廃寺では、奈良～平安時代にかけての遺構や遺物が大量に確認され、今岡廃寺一帯が英多郡における拠点の一つであることが明らかとなった⁽¹⁷⁾。また、8個体の骨蔵器がこの地域から発見され⁽¹⁸⁾、地方における新たな葬制受容の様相をうかがわせる資料である。さらに、今岡中山遺跡では古代の竪穴住居が検出されている⁽¹⁹⁾。

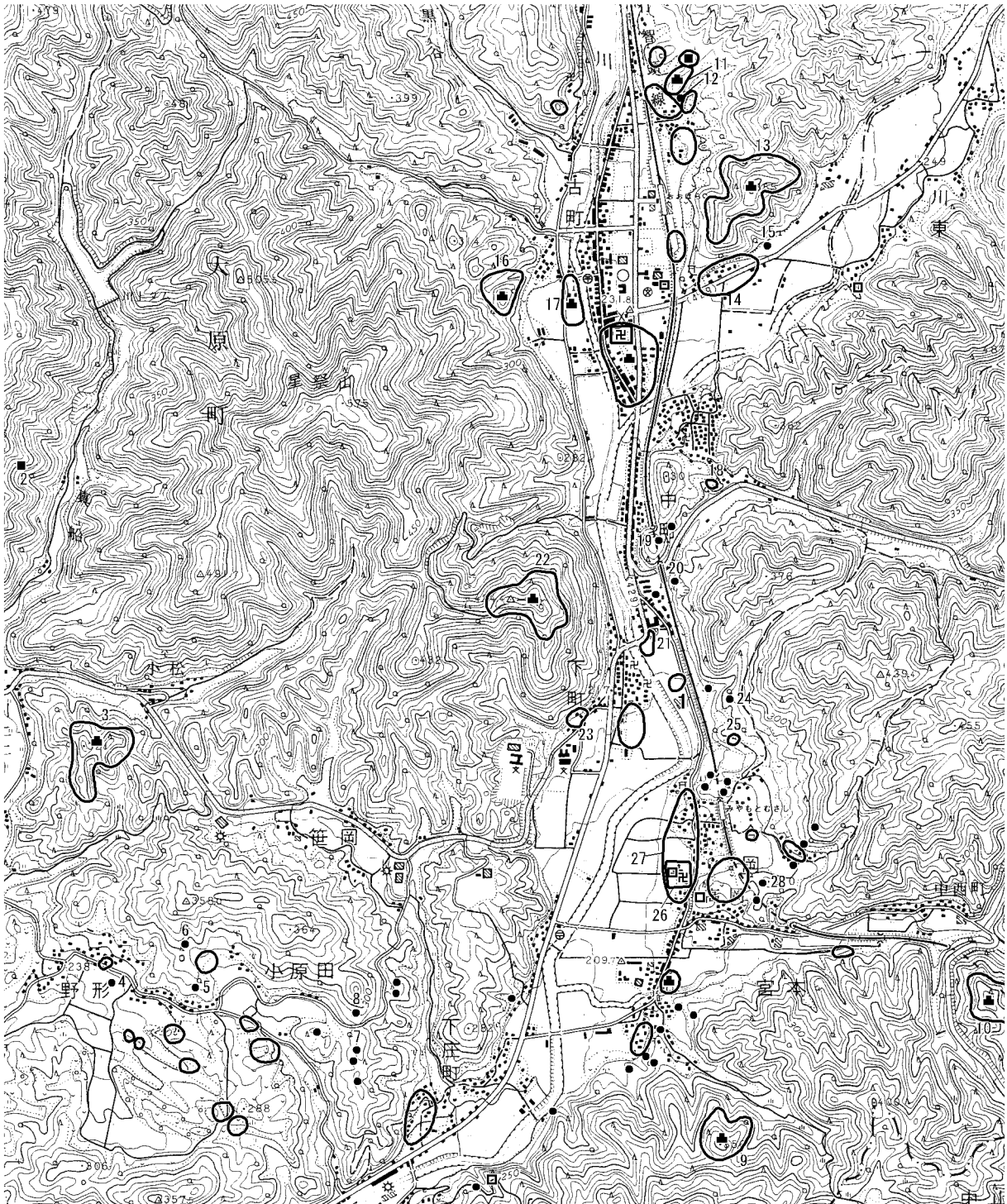
この地域の経済基盤を考える上で欠かせないものに鉄生産がある。特に古代においては美作国は、調鉄の貢納国であり、平城宮跡からは「英多里鉄⁽²⁰⁾」、「美作国英多郡大野里鉄一連⁽²¹⁾」の木簡が出土している。旧大原町内では、現在のところ製鉄遺跡は明確ではないが、先述の大野里に比定される旧大原町野形で、須恵器片とともに鉄滓が採取されている。また、壬生所在のナイゲ遺跡⁽²²⁾では、小形の横口付製炭窯が検出されている。この種の炭窯は製鉄遺跡に伴うことが知られているから、近接地に製鉄遺跡が所在している可能性が高い。

旧大原町の地域は、山陽と山陰を結ぶ交通路として重要な位置を占めており、古代には播磨と因幡を結ぶ因幡道が整備される。因幡道は現在の兵庫県佐用郡佐用町から釜坂峠を越えて美作市宮本に入り、今岡廃寺の近くを通過後、吉野川に沿ってそのまま北上し、志戸坂峠を越えて鳥取県に至るルートが想定されている。

平安時代末～鎌倉時代にかけて、前代の郷名を引き継いで大原保・讚甘荘・大野荘・吉野保が成立する。南北朝の動乱期に、美作国では播磨の赤松氏と伯耆の山名氏が覇権を争い、旧大原町域は赤松氏が支配権を握った。戦国期には在地武士の新免氏が台頭し、北の尼子氏・西の毛利氏と攻防を繰り返した。こうした動乱の時代を物語る山城は、旧大原町内の10数か所で確認されており、赤松氏が拠点とした小原山王山城、新免氏が拠点とした竹山城などの大規模な城郭のほか、中小の城郭が吉野川流域沿いに点在している。これらの城郭が築かれた背景には、戦国期になってもこの地域が、中国山地山間部における交通の要衝であったからであろう。

中世の遺跡で発掘調査が実施されたものに、川上所在の美土路遺跡⁽²³⁾がある。圃場整備事業に伴う発掘調査で、溝・土壙・柱穴などが検出され、勝間田焼・備前焼・東播系須恵器・土師質土器・瓦質土器とともに、青白磁の合子を含む中国産磁器が多く出土している。また、川上所在の真船遺跡⁽²⁴⁾では、砂防工事中に五銚杵・五銚鈴・火舎・花瓶・六器・飯食器・二器・打鳴器の法具一式が計22点も出土しており、密教法具の埋納事例として注目される。また、正平4年（1349年）造立の沢田宝篋印塔、正平11年（1356年）造立の栗野宝篋印塔のような石塔の優品が現存している。

近世に入り、旧大原町域は津山藩領を経て幕府領となるものの、18世紀後半以降幕府領や土浦藩・



- | | | | |
|----------|------------|-----------|----------|
| 1 中町B遺跡 | 8 才の凧2号墳 | 15 突出し古墳 | 22 竹山城跡 |
| 2 真船遺跡 | 9 小山城跡 | 16 会下城跡 | 23 下町陣屋跡 |
| 3 小淵城跡 | 10 比久尼城跡 | 17 縣の構 | 24 穴が辻古墳 |
| 4 野形1号墳 | 11 八幡山城跡 | 18 中町A遺跡 | 25 今岡D遺跡 |
| 5 野形2号墳 | 12 八幡山古墳 | 19 山の後1号墳 | 26 今岡廃寺 |
| 6 野形3号墳 | 13 小原山王山城跡 | 20 山の後2号墳 | 27 今岡遺跡 |
| 7 才の凧1号墳 | 14 尾崎遺跡 | 21 中町C遺跡 | 28 今岡1号墳 |

第4図 中町B遺跡と周辺遺跡分布図 (1/25,000)

佐倉藩・津山藩・明石藩などの飛地領として分割され、さらにその飛地領の支配藩が変わるなど錯綜した状況で明治維新を迎える。当地域は因幡鳥取藩主の参勤交代路として因幡街道が整備され、古町には小原宿が設けられた。現在も本陣・脇本陣を中心に伝統的な町並みが保存されており、往時の賑わいを今に伝えている。

註

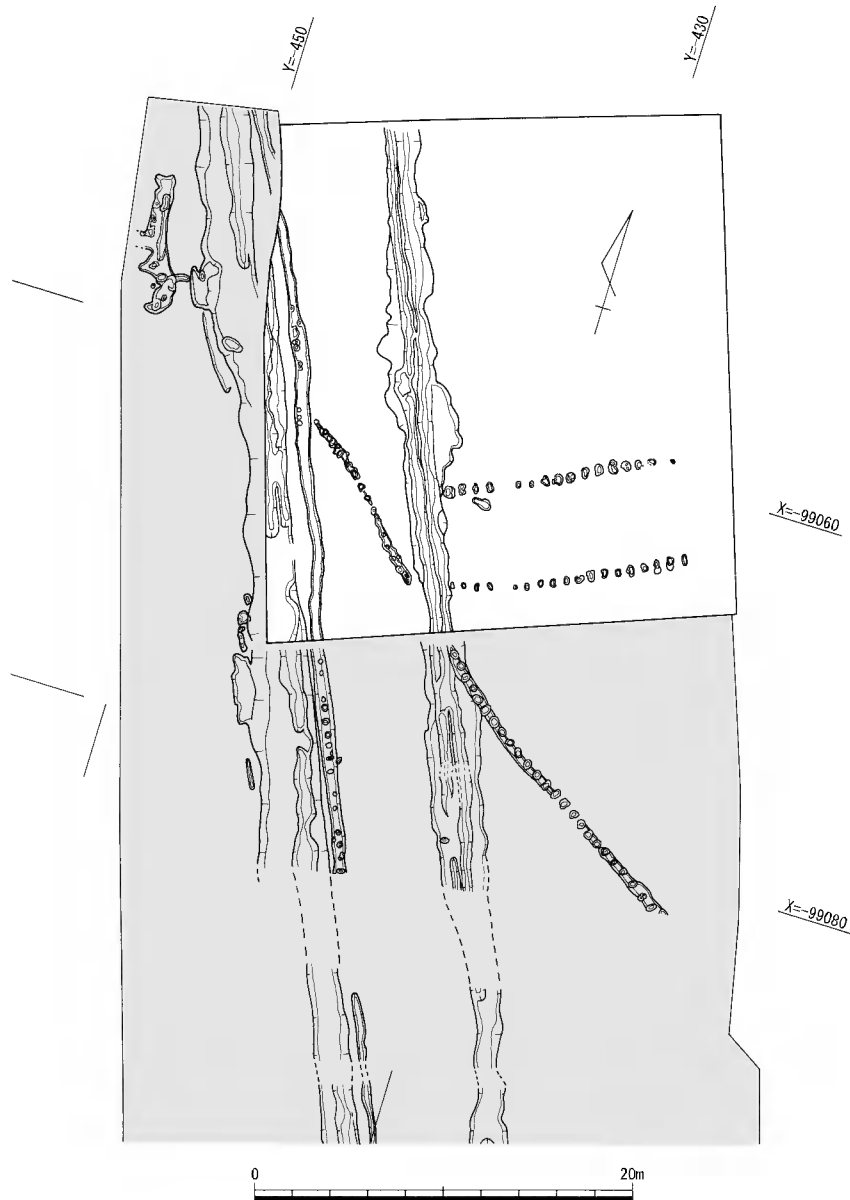
- (1) 岡山県古代吉備文化財センター『鳥取自動車道遺跡発掘ニュース第2号』 2006
- (2) 岡山県古代吉備文化財センター編『美作・大原昔絵巻』 2006
- (3) 2と同上
- (4) 上梶 武「尾崎遺跡」『岡山県埋蔵文化財報告』36 岡山県教育委員会 2006
- (5) 宇垣匡雅『川戸古墳群発掘調査報告書』岡山県大原町教育委員会 1995
- (6) 佐藤寛介「今岡廃寺」『大原町埋蔵文化財発掘調査報告』2 岡山県大原町教育委員会 2002
- (7) 内藤善史・米田克彦「今岡中山遺跡」『岡山県埋蔵文化財報告』35 岡山県教育委員会 2005
- (8) 石田爲成「中町B遺跡」『岡山県埋蔵文化財報告』35 岡山県教育委員会 2005
- (9) 大原町史編纂委員会「池が平の住居跡」『大原町史』地区史編 大原町 2001
- (10) 栗野克己・福田正継「山の後2号墳発掘調査報告」『岡山県埋蔵文化財報告』8 岡山県教育委員会 1978
- (11) 5と同じ
- (12) 岡山県立博物館学芸員佐藤寛介氏のご教示による。
- (13) 5文献に実測図が掲載されている。
- (14) 岡田 博「築出し古墳」『岡山県埋蔵文化財報告』15 岡山県教育委員会 1985
平井 勝「岡山県大原町築出し古墳の小形石棺」『古代吉備』第11集 古代吉備研究会 1989
- (15) 旧大原町が所在した英田郡は、古代は英多郡、中世以降は英田郡と表記される。本書では、古代の行政域を示す場合だけに英多郡を使い、それ以降は英田郡とする。
- (16) 正岡陸夫・岡本寛久「大海廃寺緊急発掘調査報告書」『岡山県埋蔵文化財報告』26 岡山県教育委員会 1978
岡本寛久「大海廃寺緊急発掘調査報告書Ⅱ」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』33 岡山県教育委員会 1979
- (17) 6と同じ
- (18) 美作市教育委員会で保管。すべて薬壺形の須恵器で、8～9世紀代のものと考えられる。
- (19) 7と同じ
- (20) 奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査出土木簡概報』12 奈良国立文化財研究所 1978
- (21) 奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査出土木簡概報』21 奈良国立文化財研究所 1989
- (22) 亀山行雄「壬生・ナイゲ窯跡」『岡山県埋蔵文化財報告』24 岡山県教育委員会 1994
- (23) 山磨康平「美土路遺跡ほか」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』64 岡山県教育委員会 1987
- (24) 発見当初は新畑遺跡とされていた。三輪嘉六「新畑遺跡出土の密教法具の研究」『MUSEUM(東京国立博物館美術誌)』No311 東京国立博物館 1977

第3章 調査の概要

第1節 調査区の概要

調査地は旧大原町内を流走する吉野川左岸の河岸段丘上に位置し、また平野部からの比高差約150mを測る山塊の西側裾部に立地している。調査区は、平成16年度に鳥取自動車道関連発掘調査で調査を実施した中町B遺跡の北東側に隣接している。

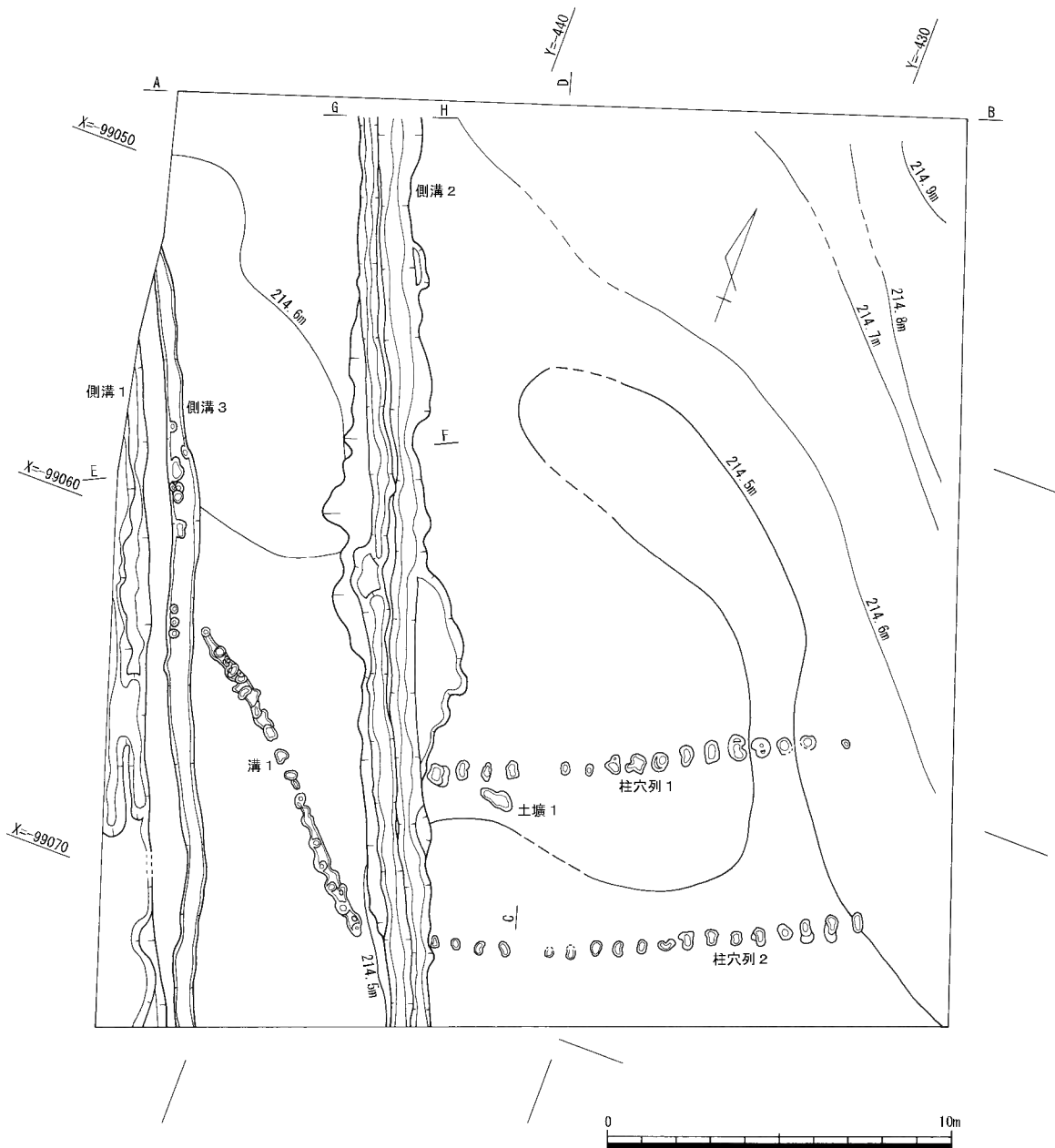
調査区の基盤層は、北隅が一番高く、南に向かうにしたがい低くなっていく。しかしながら、調査



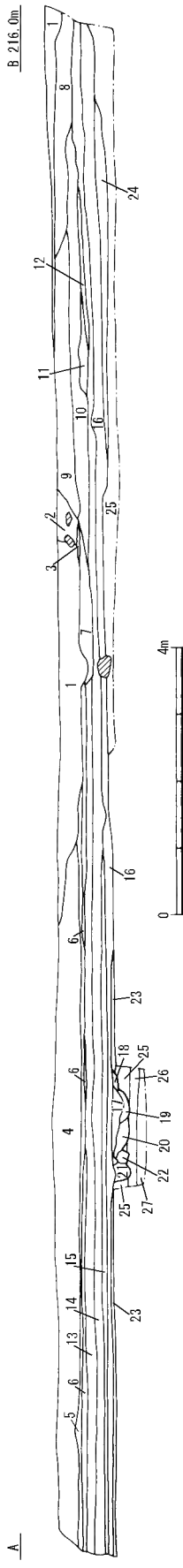
第5図 調査地配置図 (1/400) アミフセ：鳥取自動車道関連発掘調査範囲

区西隅から調査区中心部に向かって舌状の高まりが認められる。基盤層は、吉野川起源と想定される粘質砂ないしは細～微砂から成り立っているが、北東側の214.6mのコンターラインから北東側では、調査区東側の山塊からの土砂が堆積したと思われる、人頭大の角礫を含む砂利ないしは礫層が認められる。調査区は近現代の水田造成土や耕作土を除くと、第7図等に示しているように大きく4枚の包含層に分層が可能であり、さらに調査区北壁断面のみで確認されただけであるが、これらの下層に第7図第23層が認められた。道路遺構の側溝は、この第23層を切る形で掘削されているようである。なお、先の4枚の包含層については、パリノ・サーヴェイ株式会社によって造成土の可能性も指摘されている。

最後に、遺構配置図では割愛しているが、調査区の東半では人為的に掘削された痕跡に乏しい不整形の浅いピットが多数検出されている。

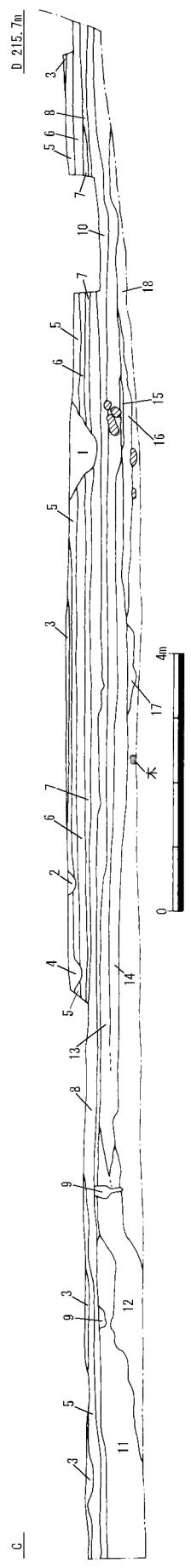


第6図 遺構配置図 (1/200)



- | | | |
|----------------------------------|----------------------------------|-------------------------------------|
| 1 暗灰褐色土 (耕作土) | 10 淡灰色土 (2~3 cm大の礫多含) | 19 暗灰褐色粘質土と灰色砂の五層 (側溝2埋土) |
| 2 淡灰褐色土 (水田右垣裏込めの土) | 11 淡褐色粘質土 (1~2 cm大の礫多含) | 20 暗灰色粘質土 (灰色砂をブロック状に含む) (側溝2埋土) |
| 3 灰色粗砂 | 12 暗灰色粘質土 (1~2 cm大の礫多含) | 21 暗灰色粘質土 (灰色砂をブロック状に含む) (側溝2埋土) |
| 4 黄褐色土 (10cm大の角礫多含) (水田造成土) | 13 暗黄灰色粘質土 (1~2 cm大の礫多含) (遺物包含層) | 22 暗灰褐色粘質土 (灰色粘質土をブロック状に含む) (遺物包含層) |
| 5 暗青灰色粘質土 (旧水田層) | 14 暗褐色粘質土 (1~2 cm大の礫多含) (遺物包含層) | 23 暗褐色粘質土 (1~2 cm大の礫多含) |
| 6 暗褐色粘質土 (床土層) | 15 灰色粘質土 (1~2 cm大の礫多含) (遺物包含層) | 24 淡黒色粘質土 (2~3 cm大の礫多含) |
| 7 黄褐色粘質土 (1~5 mm大の小礫多含) (水田造成土か) | 16 暗灰色粘質土 (1~2 cm大の礫多含) (遺物包含層) | 25 灰色粗砂 |
| 8 黄褐色土 (10cm大の角礫多含) (水田造成土か) | 17 暗灰褐色粘質土 (1~2 cm大の礫多含) (側溝2埋土) | 26 灰色粘土 |
| 9 明黄褐色土 (2~3 cm大の礫多含) (水田造成土か) | 18 黒褐色粘質土 (側溝2埋土) | 27 暗褐色砂 (植物遺体多含) |

第7図 調査区北壁断面図 (1/100)



- | | | |
|-----------------------------------|----------------------------------|------------------------|
| 1 暗褐色粘質土 | 7 灰色粘質土 (1~2 cm大の礫多含) (第7図第15層) | 13 暗灰色粘質土~粗砂 |
| 2 暗褐色砂質土 (1~2 cm大の礫多含) | 8 暗灰色粘質土 (1~2 cm大の礫多含) (第7図第16層) | 14 暗灰色粘質土 |
| 3 黄褐色砂質土 (1~2 cm大の礫多含) (床土層) | 9 淡黒色粘質土 | 15 黄褐色粗砂 |
| 4 暗黄色砂質土 (1~2 cm大の礫多含) (床土層か) | 10 淡灰色砂質土 (北側は礫多く含む) (第7図第25層) | 16 黒褐色粘質土~粗砂 (植物遺体多含) |
| 5 暗黄灰色粘質土 (1~2 cm大の礫多含) (第7図第13層) | 11 明黄褐色粘質土 | 17 黒褐色粘質土 (植物遺体多含) |
| 6 暗褐色粘質土 (1~2 cm大の礫多含) (第7図第14層) | 12 暗オリーブ色砂質土 | 18 淡青灰色砂質土 (北側は小礫多く含む) |

第8図 調査区中央南北断面図 (1/100)

第2節 検出された遺構と遺物

1 道路関連遺構

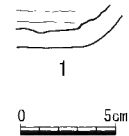
調査区の西半に所在し、鳥取自動車道関連発掘調査で検出された道路遺構の続きである。道路の側溝3条とその間に挟まれた道路面となる平坦面から構成される。鳥取自動車道関連発掘調査では道路面に波板状凹凸面が検出されているが、今回の調査ではそのような遺構は認められなかった。道路面の東西両側に側溝1と2が、側溝1の東側に側溝3が位置している。後述するが、側溝1・2と側溝3の埋土は大きく異なっており、一連の遺構として捉えられるか確証はない。道路幅は側溝内側肩幅間で側溝1-2間が約6m、側溝3-2間が約5mを測る。

側溝1 (第5・6・9・10図、図版2～4)

調査区西端で検出された溝である。東肩のみ検出され、西肩は調査区外であった。溝幅は、西側に隣接する鳥取自動車道関連発掘調査の状況から、検出面で4m前後を測る。溝の断面形は、なだらかな椀状を呈している箇所も見られるが、大部分は東肩にテラス面をもち、そこから一段深く掘削されている。埋土は暗灰褐色粘質土の一層のみであり、深く掘削されている箇所に関しても埋土の質感・色調に大きな違いは認められなかった。埋土中に地山ブロックを含むことから人為的に埋め戻された状況を呈する。

遺物は、掲載した1の須恵器平瓶の底部片以外には土師器甕の体部片が1点出土したのみである。

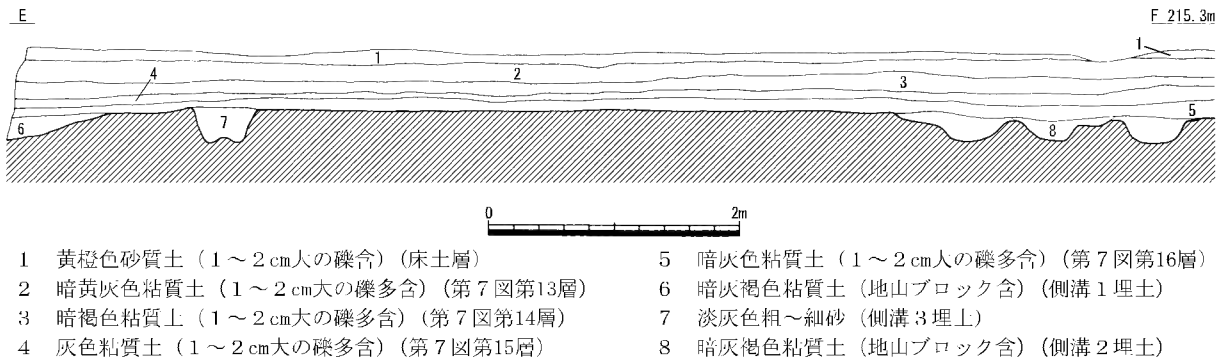
遺構の時期は古代に比定される。



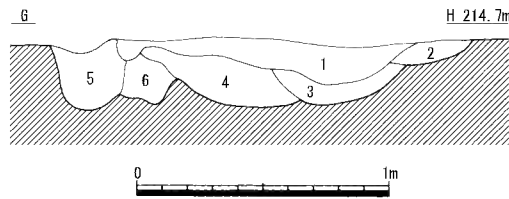
第9図 側溝1
出土遺物 (1/4)

側溝2 (第5・6・10・11図、図版2～4)

道路遺構の東側に位置している側溝で、完掘状況では2条の溝が並行して流走している様相を呈する。この2条の溝は第11図に示すとおり北壁側断面でその先後関係が判明し、西側の溝が埋没後に東側の溝が掘削されている。しかしながら平面的には切り合い関係が確認できなかったため、この先後関係が南側にまで適用可能とは断言できない。西側の溝は基盤層となる灰色砂をブロック状に含むことから、人為的に埋め戻された状況を呈する。この灰色砂ブロックは平面的にも認められた。東側の溝は、第11図の第1層が包含層と近似していることから最終的には埋め戻されたと考えられる。第3



第10図 側溝1～3断面図 (1/60)



- 1 暗灰褐色粘質土（1～2cm大の礫多含）
- 2 黒褐色粘質土
- 3 暗灰褐色粘質土と灰色砂の互層
- 4 暗灰色粘質土（灰色砂をブロック状に含む）
- 5 暗灰褐色粘質土（灰色砂をブロック状に含む）
- 6 暗灰褐色粘質土（灰色粘質土をブロック状に含む）

第11図 側溝2北壁側断面図（1/30）

層は粘土と砂の互層堆積を呈しており、この溝が機能していた時期には滞水と流水が繰り返されていた状況が確認された。しかしながらこのような互層堆積は調査区北端で確認されたのみである。

溝の幅は、調査区中央部分でたわみ状に広がっており一定していない。検出面からの深さは両者とも30cm前後である。図化可能な遺物は出土していないが、須恵器甕の体部片や土師器甕細片が出土しており、これらの遺物や溝の検出状況から、遺構の時期は古代に比定される。

なお、北壁断面の土壌をサンプリングして花粉分析を実施した。

側溝3（第5・6・10図、図版2～4）

側溝1の東に位置している溝で、幅約30cm、深さは5～10cmを測る。溝の断面は逆台形を呈し、溝1の埋土に近似している淡灰色粗～細砂で埋まっていた。溝北側の溝底には、調査区南側に隣接する鳥取自動車道関連発掘調査でも確認された、10cm前後の大きさを測る性格不明の不整形なピットが列状に検出されている。

この側溝は側溝1・2と並行しているものの、溝の形態および埋土が側溝1・2と異なっているため道路遺構に伴うものか確証はない。

今回の調査では遺物が出土していないため時期の決定は困難であるが、鳥取自動車道関連発掘調査での成果から、古代以前に比定される。

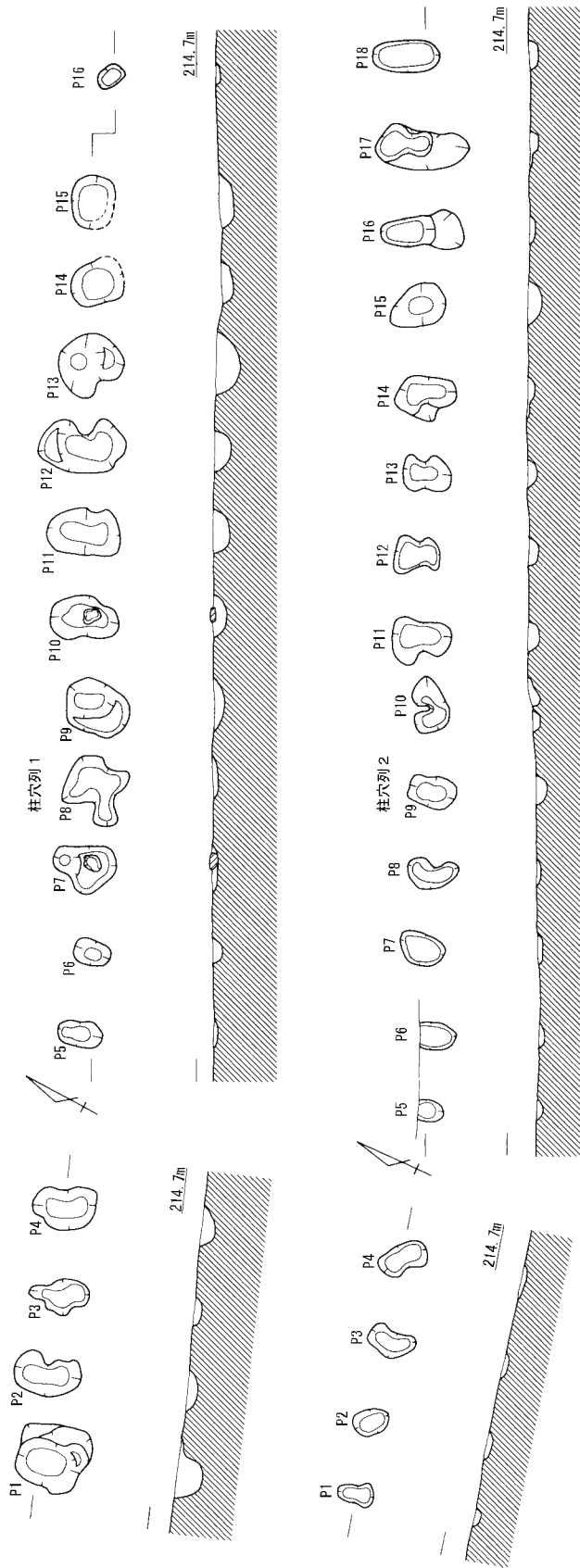
2 柱穴列

柱穴列1（第6・12図、図版2・3）

調査区東半の中央部やや南側から検出された遺構で、全長12.25mを測る。現状で16本の柱穴から構成されているが、第12図の方位の箇所は確認調査及び本調査時の南北トレンチにより消失している可能性が高く、本来は20本近くの柱穴が存在していたと思われる。柱穴は直線的に連続しておらず、やや北に向けて弧状を呈しながら検出された。これらの柱穴は、大きさが25×15cmから75×43cmまで、検出面からの深さが5～25cmまで、さらに平面形が円形・楕円形・アメーバー状を呈しているなど多様な形態が認められる。柱穴埋土はいずれも暗灰色粘質土であり、道路遺構の側溝1・2の埋土と近似している。

柱穴列2（第6・12図、図版2・3）

柱穴列1から約5m南側で検出された遺構で、全長12.5mを測る。柱穴列1の柱穴とほぼ対応関係をなしていると想定されるが、柱穴列1より2本多い18本の柱穴から成る。この柱穴列も第12図の方位の箇所に関してはトレンチ等により消失している可能性が高く、本来は20本近くの柱穴から構成されていたと思われる。柱穴の並びは、柱穴列1よりもやや強く北に向けて弧状を呈している。各柱穴の形態は楕円形やアメーバー状と多様であり、大きさもまた30×15cmから81×36cmまで認められた。検出面からの深さは全体的に浅く5～10cmを測る。



暗灰色粘質土（地山ブロック含、1～2cm大の礫多含）



第12図 柱穴列1・2（1/60）

柱穴列1・2の時期は、出土遺物がなかったものの柱穴埋土が側溝1・2と近似していることから、道路遺構と同時期である可能性が高い。

また道路遺構とほぼ直交し、柱穴が道路面まで及んでいないことから、道路遺構に伴うと想定されるものの、その性格は不明である。

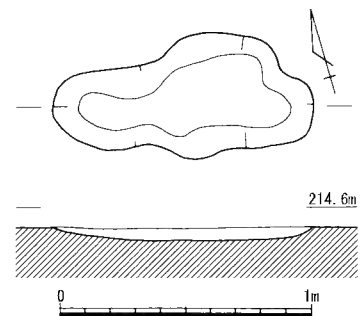
3 土壌

土壌1（第6・13図）

柱穴列1のP3・4に接するように検出された遺構である。平面形はやや不整形な楕円形を呈し、その規模は長軸103cm、短軸49cmを測る。検出面からの深さは浅く、5cmを測るのみであった。

埋土は暗灰色粘質土の1層のみで、柱穴列と同様に地山ブロックを含んでいた。

遺物は出土していないが、埋土やその検出状況から古代の範疇に収まると思われ、柱穴列と有機的な関係が存在していたかもしれない。



暗灰色粘質土（地山ブロック含）

第13図 土壌1（1/30）

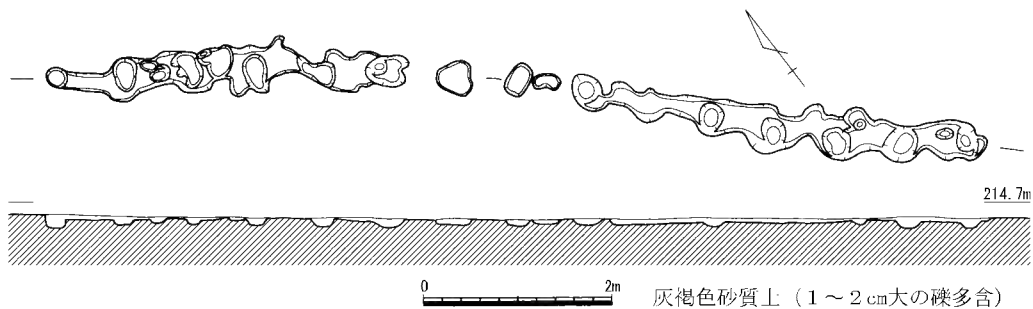
4 溝

溝1 (第5・6・14図、図版2)

道路遺構の道路面から検出された遺構で、道路遺構を斜めに横断している。溝としているが多数のピットが連続していると捉えた方が良いのかもしれない。検出面からの深さは浅く、わずかに5cm前後を測るのみである。検出長は、調査区南側の鳥取自動車道関連発掘調査で確認された分も含めると約33mを測る。埋土は道路遺構の側溝3と近似している灰褐色粗～細砂である。

さて、この溝と道路遺構の先後関係については、今回の調査では切り合いが確認できずさらに遺物も出土していないため判断できなかったが、鳥取自動車道関連発掘調査においては道路遺構より古いと想定されているようである。

遺構の時期は、古代以前である。

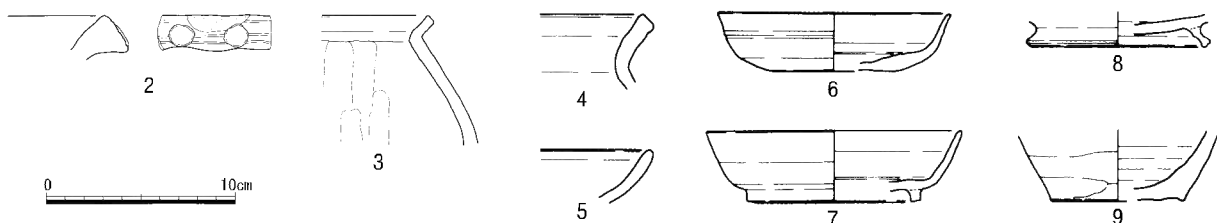


第14図 溝1 (1/80)

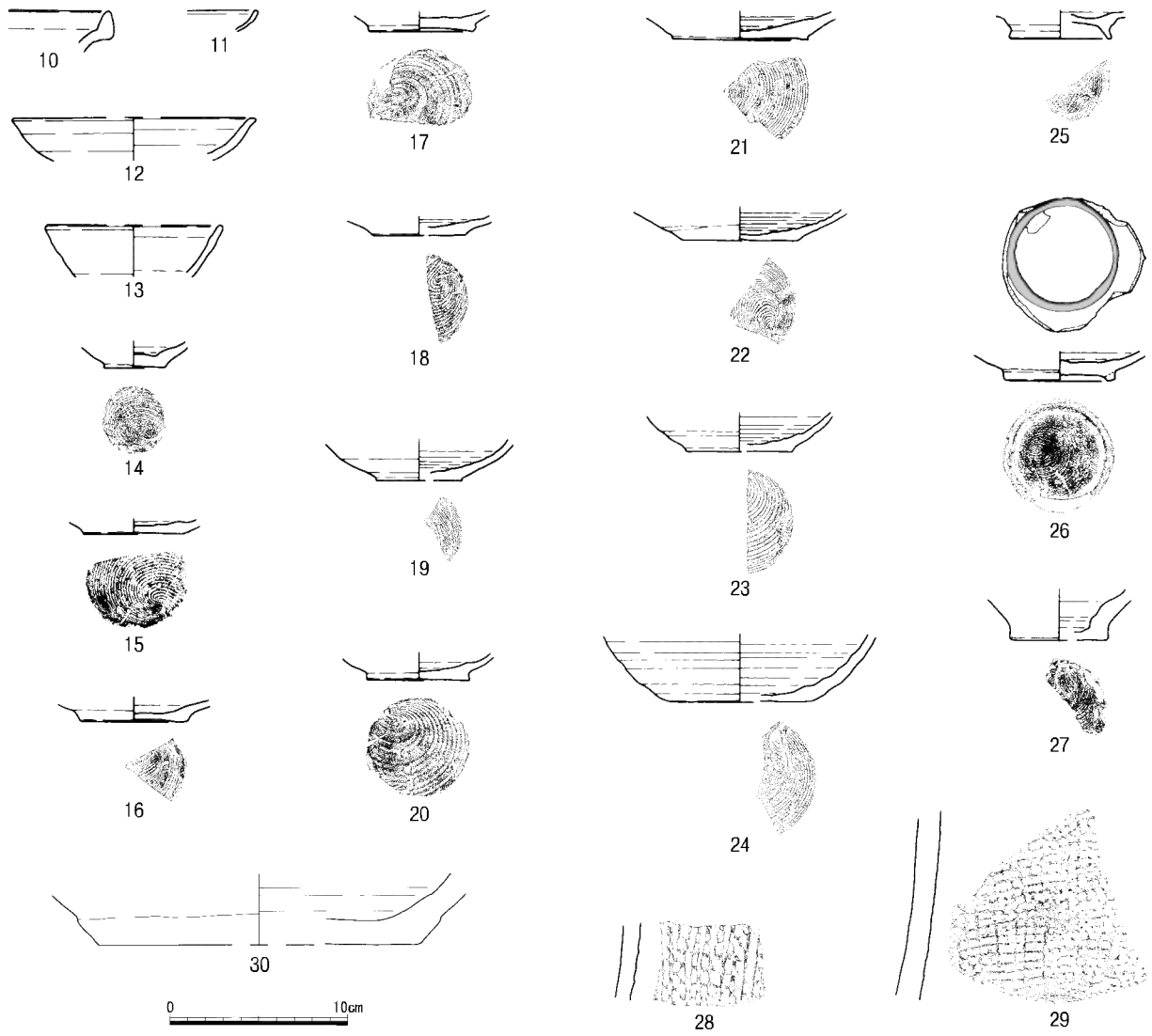
5 包含層出土遺物

今回の調査で出土した遺物はほぼすべて包含層中からであり、遺構に伴うものは少ない。包含層は、先述したように近現代の水田耕作土と造成土より下層では基本的に4層に分層され、それらは第7図第13層が近世、第14層が中世後半、第15・16層が中世前半までの遺物を含んでいた。また、包含層中には加工痕が認められる木片が多く含まれていた。

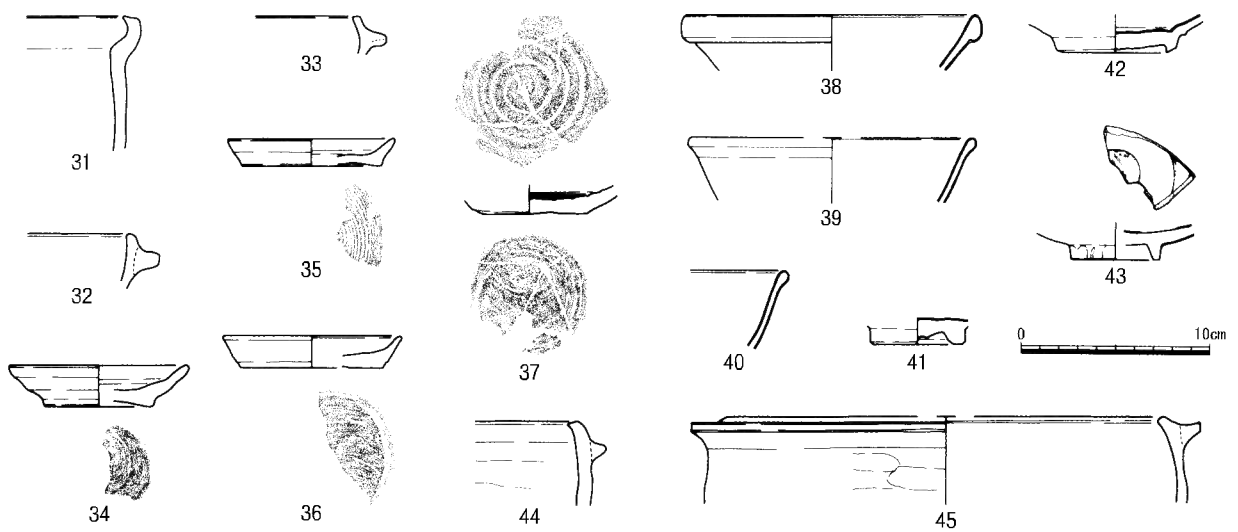
2は弥生時代中期後葉の壺の口縁部である。口縁部には沈線を3条施し、その上に円形浮文を2個貼り付けている。3は弥生時代後期前半の甕である。4・5は古墳時代の土師器で、4は甕、5は鉢である。6は須恵器杯、7・8は高台が付いた須恵器杯、9はおそらく壺の底部と思われる。10は勝間田焼の壺の口縁部である。口縁部は上方につまみだしている。12~26は勝間田焼椀で、底部はいずれも糸切りである。25・26は高台が付いた椀である。27の勝間田焼椀内面には重ね焼きの際に付着した高台（アミフセ部）が残存していた。30は東播系須恵器の捏ね鉢底部である。31は受け口をもつ土



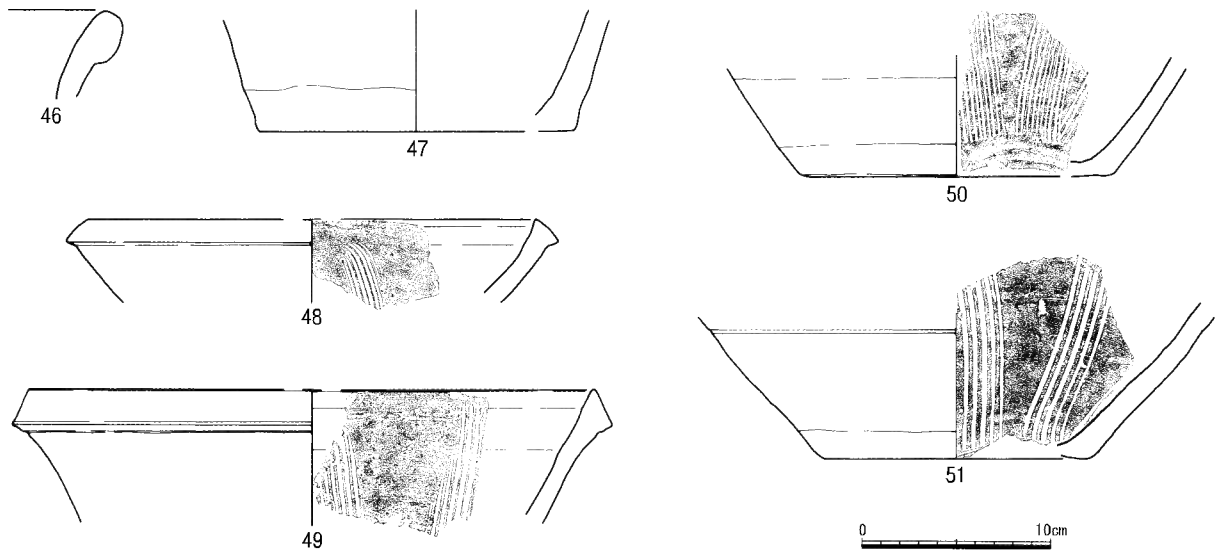
第15図 包含層出土遺物<弥生土器・土師器・須恵器> (1/4)



第16図 包含層出土遺物<勝間田焼・東播系須恵器> (1/4)

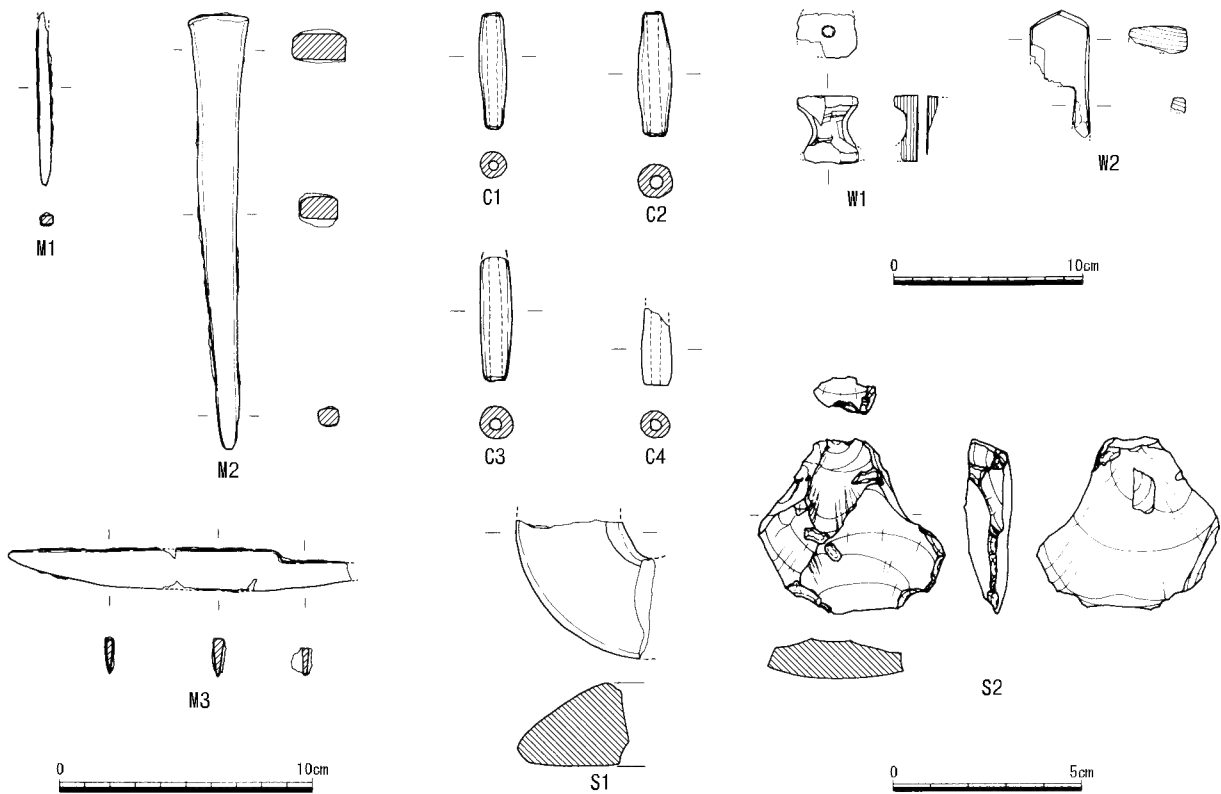


第17図 包含層出土遺物<土師器・輸入磁器・瓦質土器> (1/4)



第18図 包含層出土遺物<備前焼> (1/4)

師器鍋、32・33は土師器羽釜である。34~36は底部糸切りの小皿である。37は土師器椀底部で、内面には渦巻き状に調整痕が残存している。38は白磁の碗、39~42は青磁の碗である。43は胎土目が内面に認められる青白磁の碗底部である。M2は馬鋤の歯、M3は刀子である。M3の刀子は茎部分に木質が残存している。W1は糸巻きである。S1は環状石斧の破損品である。S2は不定形剥片を用いたRFであり、形態から縄文時代以前にまでさかのぼる可能性を示唆させる。



第19図 包含層出土遺物<金属器・土製品・木製品・石器> (1/4・1/3・1/2)

第3節 小結

今回の発掘調査では、鳥取自動車道関連発掘調査で確認された道路遺構の続きが検出されている。しかし、検出された長さは鳥取自動車道関連発掘調査の1/7弱しかなく、さらに西側側溝については東肩部しか確認されていないため、道路遺構の全容について語れる状況ではない。よって、今回の調査で判明した事実について、若干の整理をおこない小結としたい。

今回の道路遺構は、幅約5～6mを測る平坦な道路面と3条の側溝から構成されている。これら3条の側溝のうち、側溝1・2については完掘状態及び断面等の状況から2条の溝で構成されていることが今回の調査及び鳥取自動車道関連発掘調査から判明している。このうち側溝2に関してはすでに今回の事実報告で「西側の溝」→「東側の溝」という先後関係があることを指摘した。では、側溝1の先後関係はどうであろうか。今回の調査では先後関係は不明であったが、全体の調査を実施した鳥取自動車道関連発掘調査では「東側の溝」→「西側の溝」と想定されているようである。よって、道路面が拡張している可能性が高い。

次に道路遺構の時期を求めてみたい。道路遺構の側溝からは量は少ないものの、古代に比定される須恵器や土師器が出土している。また、側溝2（第7図第17層）から出土した炭化材の放射性炭素年代測定を実施した結果、 1280 ± 80 y BPの年代が得られている。さらに、道路遺構を覆っていた第7図第16層が中世前半の遺物を含む造成土の可能性が指摘されていることなどから、側溝の廃絶時期が中世初頭まで繰り上がる可能性は否定できないものの、側溝として機能していた時期は古代の範疇に収まると想定され、道路遺構は古代因幡道と想定されよう。

最後に、側溝2の北側において粘土と砂の互層堆積が確認された（第7図第19層）。この互層堆積は側溝が機能していた時期に形成されたものと想定されたため、道路遺構に沿って植樹等がなされていたのかを判断するための花粉分析を実施した。詳しくは付載を参照していただきたい。また、この道路遺構とほぼ直交するように2列の柱穴列が検出されているが、その性格は不明である。

付載 中町B遺跡の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

中町B遺跡は美作市中町にあり、吉野川東岸に立地し、発掘調査の結果、古代以前の土壙・溝・柱穴のほか、古代の「古代因幡道」と考えられる道路遺構が検出されている。今回の分析調査では、古代の道路遺構が構築されているベースをなす堆積物と道路遺構側溝2埋積物の形成年代について、AMS法による放射性炭素年代測定を行い検討する。また、道路遺構が機能していた時期および、それ以前の時期の古植生について花粉分析による検討を行う。

1. 調査地点の概要

分析調査は、道路遺構東側の側溝2から東側（山側）にかけての堆積層の累重状況が確認された調査区北壁で実施する。北壁断面の堆積層の累重状況を模式柱状図として図1に示す。調査地点最下位には、巨礫を含む細礫・粗粒砂～シルトからなる基質支持（マトリクスサポート）の砂礫層が認められる。砂礫層上面は山地側から東西方向に傾斜している。層相から土石流に由来する可能性があるが、砂礫層下部の層相や外形が不明であり今後の検討が必要である。砂礫層の上位には上方細粒化する級化成層をなすシルト混じり細粒砂の27層が累重する。27層の形成時期は、後述する放射性炭素年代測定値から約3000年前以降に形成されたことが推定される。27層上部は生物擾乱により堆積構造が不明瞭となっており、土壌構造が確認される。27層の上位には不明瞭な水平葉理をなし極細粒砂混じりシルトからシルト質細粒砂へと逆級化をなす堆積ユニットの積層が観察される(26層・25層)。この逆級化を示す堆積ユニットは、河川堆積物のうち氾濫原に累重する洪水堆積物に特徴的に認められる堆積構造である（増田・伊勢屋, 1985）。以上のことから26・25層は氾濫原の堆積環境下で形成された堆積物であること、25層形成期後半には離水し、植生に覆われる土壌発達が行われる環境に変化したことが推定される。調査地点における古代の道路遺構は、この土壌層準に構築されている。

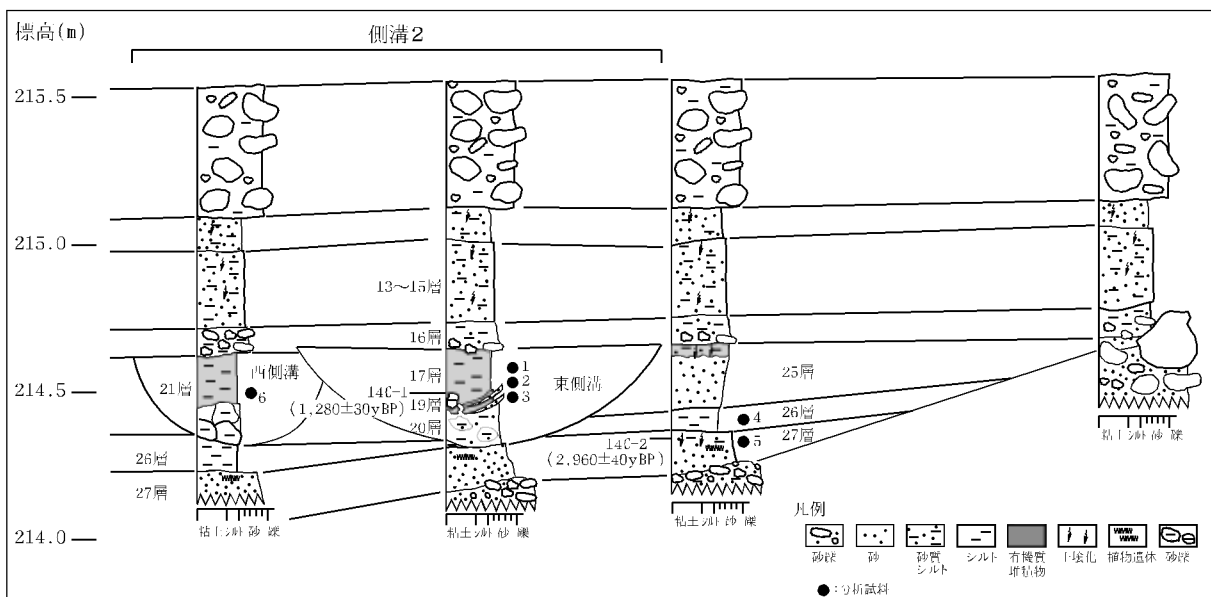


図1 調査地点の層序（層名は第7図に対応）

道路遺構東側の側溝2は、調査地点では上記の25・26層の氾濫堆積物を掘削して構築されている。側溝2は2条の溝からなり、埋積層の状況から、西側溝が埋積された後、東側溝が再掘削されていることが確認される。側溝2の西側溝埋積物は、下部に25・26層に由来する接合性の高い偽礫（ブロック土）が確認される。溝掘削時の加工に伴うものと判断される。その上位には腐植に富む泥質堆積物からなる21層が堆積する。21層は見かけ上塊状をなすが、人為的擾乱が原因とみられる偽礫ないし集合体が観察される。また、中・上部には葉理構造をなす砂質泥堆積物からなる偽礫、25・26層に由来する偽礫が確認される。偽礫の大きさが不揃いであることから人為的な盛土の可能性はある。これらのこと、後述する東側溝の掘削時の影響等を考慮すると、21層は溝機能期から放置期ないし埋め戻し期の堆積物からなることが推定される。一方、東側溝埋積物最下部に堆積する20層は、26層に由来する垂角塊状をなす偽礫がまじる見かけ上塊状をなす腐植質泥からなる。東側溝掘削時に形成された溝底の人為的擾乱を示す堆積物と判断される。その上位の19層は溝壁面に部分的に残存する堆積層で上方細粒化する葉理をなす細粒砂～シルトの堆積ユニットの累重からなる。層相から、溝機能期の水流下で形成された堆積物で部分的に残存したものと判断される。東側溝埋積物上部の17層は見かけ上塊状をなすが、垂角塊状の細礫・砂混じりの腐植質泥の偽礫ないし集合体からなる。溝機能期もしくは放置期に溝周辺より崩落などや流れ込みにより堆積したことが推定される。なお、17層下部の炭化材の14C年代測定結果は、後述するように 1280 ± 80 yBP（暦年較正值：calAD1048-1311）を示した。道路遺構が古代因幡道に相当するとする発掘調査所見と同調する結果となっている。

溝埋積物の上位には中世の整地層である16層、その上位に氾濫堆積物を母材とする垂直方向に偽礫の大きさが小さく、かつ揃ってくる土壌構造をなす、耕作土の13～15層が累重している。

2. 試料

分析試料の採取位置を図1に示す。放射性炭素年代測定は、は道路遺構側溝2内から出土した炭化材（14C-1）と、溝のベースをなす27層より出土した木材遺体（14C-2）について実施する。花粉分析は、道路跡の側溝内堆積物から採取した試料1～3・6、溝が構築されている基盤層から採取した試料4・5の6点について実施する。

3. 分析方法

(1) 放射性炭素年代測定

測定は、AMS法で実施する。放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。測定年代は1950年を基点とした年代（yBP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma;68%）に相当する年代である。暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.0（Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer）を用いる。なお、分析にあたっては（株）加速器分析研究所の協力を得た。

(2) 花粉分析

試料約10gについて、水酸化カリウム処理、篩別、重液分離（臭化亜鉛：比重2.3）、フッ化水素酸処理、アセトリシス（無水酢酸9，濃硫酸1の混合液）処理、の準に物理・化学的処理を行い、花粉・孢子化石を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、400倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定・計数する。結果は同定・計数結果の一覧表と主要花粉化石群集の層位分布図として表示する。

3. 結果

(1) 放射性炭素年代測定

測定結果および暦年較正結果を表1に示す。暦年較正に関しては、本来10年単位で表すのが通例であるが、将来的に暦年較正プログラムや暦年較正曲線の改正があった場合の再計算、再検討に対応するため、1年単位で表している。今回の試料は、出土状況や $\delta^{13}C$ の値からみて、いずれも陸域由来の炭素によって構成されていることから、北半球の大気圏内の ^{14}C に由来する較正曲線を用いた暦年較正を行う。暦年較正は、測定誤差 σ 、 2σ 双方の値を計算する。 σ は統計的に真の値が68%の確率で存在する範囲、 2σ は真の値が95%の確率で存在する範囲である。また、表中の相対比とは、 $\sigma \cdot 2\sigma$ の範囲をそれぞれ1とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。

(2) 花粉分析

結果を表3、図2に示す。側溝2のベースをなす26・27層（試料4・5）は、いずれも木本花粉化石の割合が高い。木本花粉は、アカガシ亜属の割合が高く、モミ属、スギ属、クマシデ属-アサダ属、ニレ属-ケヤキ属などを伴う。側溝2埋積物（試料1~3・6）は、26・27層に比べ草本花粉の割合

表1 放射性炭素年代測定結果と暦年較正結果

試料名 地点・層位	試料状態 種類	測定年代 (yBP)	$\delta^{13}C$ (‰)	補正年代 (yBP)	暦年較正年代 (cal)				相対比	Code No.	
					σ	cal AD	680 - 724	cal BP			1,270 - 1,226
14C-1 側溝2 17層下部	炭化材 クスギ節	1,300 ± 30	-26.25 ± 0.92	1,280 ± 30 (1,279 ± 34)	σ	cal AD	739 - 771	cal BP	1,211 - 1,179	0.575	IAAA- 50486
						cal AD	659 - 782	cal BP	1,291 - 1,168	0.957	
					2σ	cal AD	789 - 811	cal BP	1,161 - 1,139	0.034	
						cal AD	846 - 855	cal BP	1,104 - 1,095	0.010	
14C-2 27層	材 針葉樹	2,940 ± 40	-23.60 ± 0.90	2,960 ± 40 (2,961 ± 38)	σ	cal BC	1,260 - 1,227	cal BP	3,210 - 3,177	0.245	IAAA- 50487
						cal BC	1,223 - 1,126	cal BP	3,173 - 3,076	0.755	
					2σ	cal BC	1,311 - 1,048	cal BP	3,261 - 2,998	1.000	

- 1)年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用。
- 2)BP年代値は、1950年を基点として何年前であることを示す。
- 3)付記した誤差は、測定誤差 σ （測定値の68%が入る範囲）を年代値に換算した値。
- 4)暦年較正計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.0 (Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer) を使用。
- 5)暦年較正計算には表に示した（ ）内の丸める前の値を使用している。

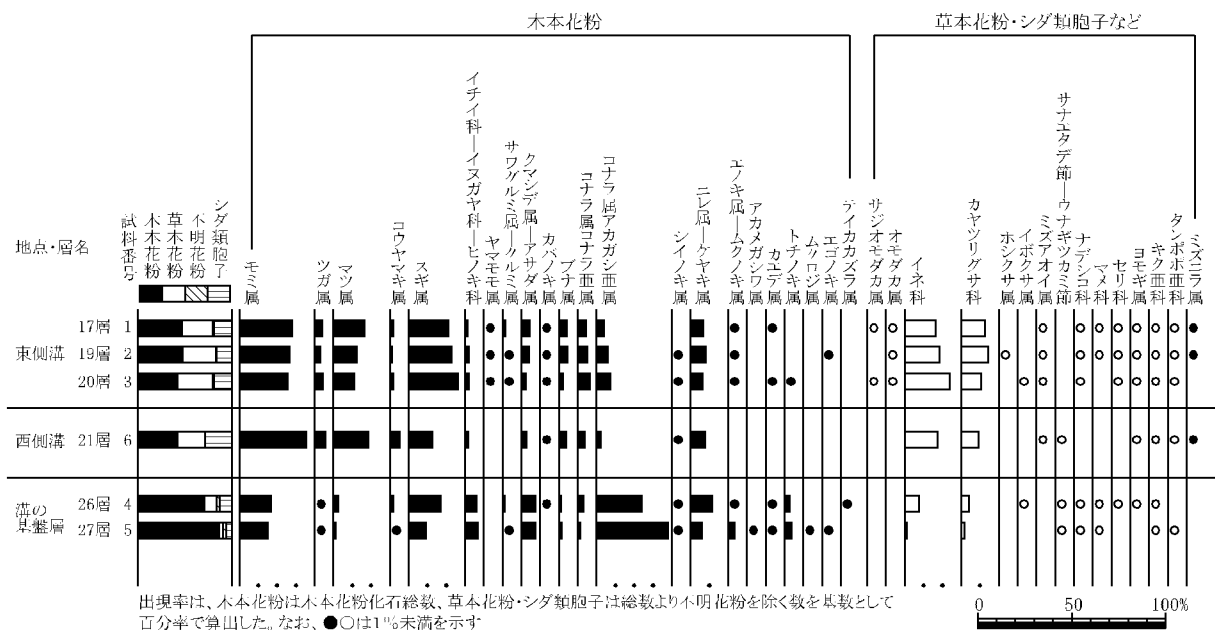


図2 花粉化石群集の層位分布

が高い。木本花粉では、モミ属、マツ属、スギ属が多く、ツガ属、クマシデ亜属-アサダ属、コナラ属、アカガシ亜属、ニレ属-ケヤキ属などを伴う。草本花粉は、イネ科とカヤツリグサ科が多く検出され、サジオモダカ属、オモダカ属、ミズアオイ属、ミズニラ属などの水生植物を伴う。

4. 考察

古代の道路遺構のベースをなす堆積物である27・26層は、層相から氾濫原の堆積環境下で形成された氾濫堆積物と考えられることから、両層の花粉化石群集は当時の集水域周辺の広い範囲よりもたらされた異地性の群集からなり、広域の植生を反映していることになる。

27・26層の花粉化石群集は、木本花粉の割合が高く、その中で暖温帯性常緑広葉樹林の主要構成要素であるアカガシ亜属が多産することが特徴である。随伴種をみると、モミ属・スギ属・イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科といった針葉樹、クマシデ属-アサダ属・ニレ属-ケヤキ属、エノキ属-ムクノキ属などの落葉広葉樹の種類を伴っている。このうち針葉樹の種類は暖温帯から冷温帯にかけての推移帯に分布する中間温帯林の構成要素でもあり、落葉広葉樹の種類も多くは河畔林の構成要素でもある。これら花粉化石群集の特徴から、26・27層が形成された、約3000年前以降から古代までの時期には、調査区周辺にカシ類などの常緑樹広葉樹が分布する暖温帯の植生が存在したことが推定される。また、モミ属・スギ属等の針葉樹やクマシデ属-アサダ属やニレ属-ケヤキ属などの落葉広葉樹も当時の

植生構成要素として存在した。この植生は、後述する古代の植生と比較して、人間による攪乱の少ない、自然度の高いものであったと推定される。なお、本地域の現在の植生はコナラ・アベマキなどの落葉広葉樹からなる二次林、伐採跡地のヌルデ・タラノキ・アカメガシワなどの低木林からなり、

表2 花粉分析結果

種類	地点・試料番号					
	東側溝			西側溝		溝の基盤層
	17層	19層	20層	21層	26層	27層
	1	2	3	D	4	5
木本花粉						
マキ属	-	-	-	-	2	-
モミ属	97	97	65	114	58	50
ツガ属	14	11	11	18	1	3
トウヒ属	-	1	-	-	-	-
マツ属単維管束亜属	1	-	-	-	-	-
マツ属複維管束亜属	36	28	13	51	3	1
マツ属(亜属不明)	20	17	15	9	6	3
コウヤマキ属	7	4	5	17	6	2
スギ属	74	83	66	40	59	31
イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	5	8	5	5	21	23
ヤマモモ属	1	1	1	-	-	-
サワグルミ属	2	-	-	-	-	-
クルミ属	3	2	1	-	4	3
クマシデ属-アサダ属	15	15	6	9	26	25
ハシバミ属	-	1	-	-	1	-
カバノキ属	2	3	2	1	2	-
ハンノキ属	-	-	1	-	-	-
ブナ属	15	16	5	12	4	5
コナラ属コナラ亜属	15	19	16	12	10	4
コナラ属アカガシ亜属	14	22	19	7	83	126
シイノキ属	-	2	2	1	1	2
ニレ属-ケヤキ属	23	29	16	25	40	20
エノキ属-ムクノキ属	1	1	1	-	1	11
カツラ属	-	-	-	-	2	-
イスノキ属	-	-	-	-	-	2
アカメガシワ属	-	-	-	-	-	1
ウルシ属	-	-	-	-	-	1
カエデ属	2	-	1	-	2	3
トチノキ属	-	-	1	-	10	13
ムクロジ属	-	-	-	-	-	2
エゴノキ属	-	1	-	-	-	1
イボタノキ属	-	1	-	-	-	-
テイカカズラ属	-	-	-	-	3	-
草本花粉						
サジオモダカ属	1	-	1	-	-	-
オモダカ属	1	2	2	-	-	-
イネ科	118	139	141	132	35	4
カヤツリグサ科	92	107	62	71	20	7
ホシクサ属	-	1	-	-	-	-
イボクサ属	-	-	1	-	2	-
ミズアオイ属	2	1	3	4	-	-
ユリ科	-	-	-	1	-	-
サナエタデ節-ウナギツカミ節	-	-	-	2	1	1
アカザ科	-	1	-	1	-	-
ナデシコ科	1	1	2	-	3	1
カラマツソウ属	-	-	1	-	-	-
キンボウゲ科	-	1	-	-	-	-
バラ科	-	1	2	-	-	-
マメ科	2	1	-	-	1	1
キカシグサ属	-	2	-	-	-	-
セリ科	6	2	1	-	1	-
オミナエシ属	1	-	-	-	-	-
ヨモギ属	7	7	5	7	1	-
キク亜科	6	1	2	5	1	1
タンポポ亜科	1	1	1	1	-	1
不明花粉	7	6	5	2	15	14
シダ類孢子						
ヒカゲノカズラ属	-	-	-	1	1	1
ゼンマイ属	-	-	1	2	-	-
イノモトソウ属	-	1	-	3	-	-
ミズニラ属	5	5	-	1	-	-
他のシダ類孢子	135	115	115	210	64	21
合計						
木本花粉	347	362	252	321	345	332
草本花粉	238	268	224	224	65	16
不明花粉	7	6	5	2	15	14
シダ類孢子	140	121	116	217	65	22
総計(不明を除く)	725	751	592	762	475	372

山地もスギやヒノキなどの植林となっている（環境庁，1988）。今回推定された植生は、現在の植生とも大きく異なっていたことが推定される。

中国地方各地の花粉分析結果では、常緑広葉樹のアカガシ亜属が約7000～8000年前以降に増加開始し、縄文海進最盛期には中国山地の1000m前後の高地でも多産するようになるが、その後、約4500年前以降の減暖期になり減少傾向を示し、モミ属・ツガ属・スギ属などの温帯性針葉樹や落葉広葉樹の花粉化石が増加するようになる（三好，1998；高原，1998 a・b）。本遺跡周辺では、今回の結果から、約3000年前頃までは照葉樹林と呼べる林分が存在したことになる。次に古代の古植生について検討する。

古代の道路遺構側溝2埋積物中の花粉化石群集は、機能期と放置期と考えられる堆積物で大差なく、類似する組成を示した。道路遺構が機能していた期間を通じて、周辺植生が大きく変化しなかったことを示唆する。また、上記した26・27層の群集組成と比較して、草本花粉の占める割合が高く、木本群集で多産していたアカガシ亜属が低率となり、スギ属・モミ属・マツ属といった針葉樹が増加している。花粉化石群集から古植生を推定する場合、堆積物中への花粉化石の取り込まれ方（タフオノミー）を踏まえた解釈が重要である。上記したベースをなす氾濫堆積物と溝埋積物とでは、その成因や堆積盆のサイズが異なり、花粉化石群集の形成過程も異なる。杉田（1999）のシミュレーション研究成果によると、花粉化石群集が反映する植生は、堆積盆のサイズと花粉を供給した母植物との距離、植生のパッチサイズと関連しており、植生パッチサイズを一定とし、堆積盆のサイズを変化させ、堆積盆内各地点の花粉組成をシミュレーションさせた結果、堆積盆サイズが大きい場合、堆積盆内の各地点の花粉組成が類似し、逆に小さくなると地点間でのバラツキが大きくなることが確認されている。今回の溝埋積物は極小さい堆積盆であることから、複数地点間の花粉化石群集のバラツキを確認することで、溝周辺の植生を推定することが可能となる。今回の調査区では1カ所の調査成果であるが、本調査区に隣接する調査区において、同時期の溝内の花粉化石群集が確認されている（未公表）。その結果と比較すると、草本花粉の産状において多少の差異が確認されるが、主要木本花粉組成には優位な差異が確認されず、主要木本花粉の産状にバラツキが存在しないことになる。堆積盆のサイズが小さいことからみて、溝埋積物の木本花粉の多くは溝より離れた山地などの植生を反映していることが想定される。仮に道路沿いに植栽樹が存在した場合、溝内の花粉化石群集において植栽樹の花粉が多産するといった産状を示すものと思われる。現時点では、このような産状は確認されておらず、道路沿いの植栽樹の存在を積極的に支持する結果は得られていない。また、草本花粉は樹木花粉に比較して、飛散距離が小さく、花粉生産量も少ない種類が多い。そのため、堆積盆サイズが大きくてもバラツキが大きくなることもある。このような特徴を有する草本花粉が概ね類似した産状を示していることは、古代の溝周辺が同様な草本植物が生育する、開けた場所であったことを示唆する。

溝内およびその周辺にはイネ科やカヤツリグサ科の植物が分布していたとみられる。また、抽水植物のサジオモダカ属・オモダカ属・ミズアオイ属や沈水植物のミズニラ属の花粉化石が認められたことから、これら水生植物の種類が溝内や溝の集水域に生育していたことも推定される。なお、これら水生植物の種類は水田雑草の種類でもあり、そのほかの草本植物の種類にはいわゆる雑草の種を含む種類が認められることから、耕作地など人間の攪乱を強く受けた領域が広がっていたことが窺える。

一方、当時の周辺の山地斜面などの森林植生は、先述した26層・27層形成期に比較して大きく変化している。常緑広葉樹のカシ類が減少し、スギ属やモミ属・マツ属などの針葉樹を主体とする植生に

変化していたことが推定される。針葉樹のうちマツ属は痩地でも育ち、成長が早い陽樹であり、森林伐採等で森林が失われた場所に先駆的に進入し、二次林を構成する要素でもある。今回の結果にみられるマツ属の産状も、人為的な開発の結果、二次林としてのマツ林が分布拡大したことを示している可能性がある。マツ属の増加は、中国山地の各地で見られるが、その増加時期は300～2000年前と地域によって差がある(三好,1988)。これは開発が及んだ時期の違いが関係している可能性がある。今回のマツ属が人為的な植生攪乱に起因するものだとすると、本地域では古代には二次林の分布拡大が始まっていたことになる。

5. まとめ

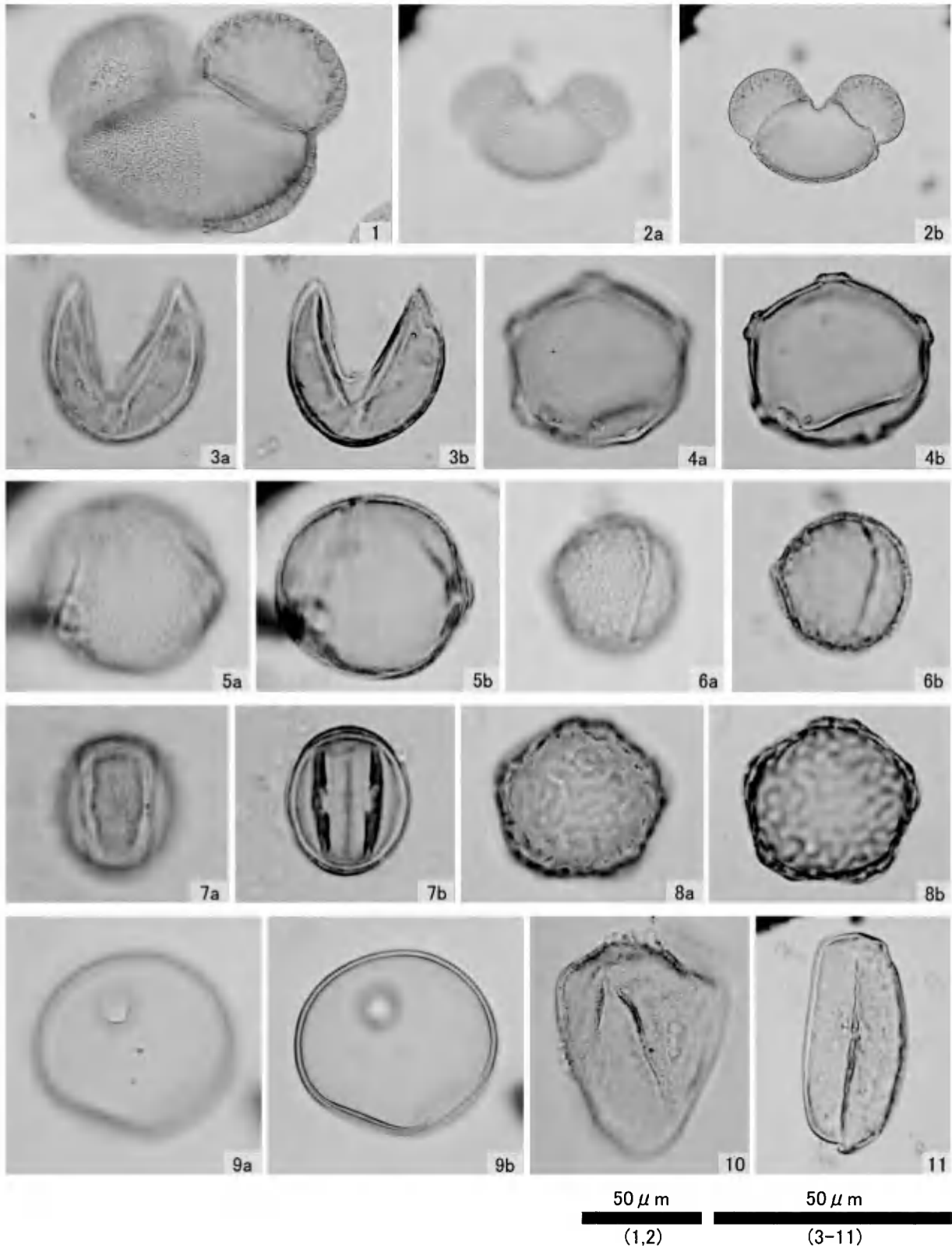
古代の道路遺構側溝2埋積物と道路遺構のベースをなす堆積物について、形成年代および古植生に関する検討を行った結果、以下のことが明らかとなった。

- 1)約3000年前頃の調査区は河川の洪水等の影響をうける氾濫原の堆積環境であった。この時期は周辺山地の植生は、カシ類などを主体とする暖温帯性の植生であった。
- 2)約3000年前以降、古代までの間のある時期に調査区は離水し、土壌形成が行われる場所に変化した。
- 3)古代とされる道路遺構の側溝2埋積物は、放射性炭素年代測定の結果、12・13世紀頃に埋没していることが推定された。
- 4)道路遺構の側溝2周辺の植生は草本植物を主体としており、植栽樹などの存在は確認されなかった。一方、周辺山地の植生は、モミ属・スギ属・ツガ属などの針葉樹の目立つ植生であり、人間の攪乱を受けた植生であった可能性が示唆された。

引用文献

- 環境庁, 1988, 第3回自然環境保全基礎調査 植生調査報告書(岡山県), 37p.
- 増田 富士夫・伊勢屋 ふじ子, 1985, “逆グレーディング構造”: 自然堤防帯における氾濫洪水堆積物の示相堆積構造. 堆積学研究会会誌, 22・23, 108-116.
- 三好 教夫, 1998, 中国・四国地方の植生史. 図説 日本列島植生史, 安田 喜憲・三好 教夫編, 朝倉書店, 138-150.
- 杉田真哉, 1999, 人間・環境系としての植生の復元と空間スケール—化石花粉はどこから飛んできたのか—. 「環境と歴史」, 石 弘之・横山浩一・安田喜憲・義江彰夫編, 新世社, 89-110.
- 高原 光, 1998a, 近畿地方の植生史. 図説 日本列島植生史, 安田 喜憲・三好 教夫編, 朝倉書店, 114-137.
- 高原 光, 1998b, スギ林の変遷. 図説 日本列島植物史, 安田喜憲・三好 教夫編, 朝倉書店, 207-223.

図版1 花粉化石



- | | |
|--------------------|-----------------------|
| 1. モミ属 (試料番号6) | 2. マツ属複維管束亜属 (試料番号6) |
| 3. スギ属 (試料番号4) | 4. クマシデ属-アサダ属 (試料番号4) |
| 5. ブナ属 (試料番号2) | 6. コナラ亜属 (試料番号2) |
| 7. アカガシ亜属 (試料番号5) | 8. ニレ属-ケヤキ属 (試料番号4) |
| 9. イネ科 (試料番号6) | 10. カヤツリグサ科 (試料番号6) |
| 11. ミズアオイ属 (試料番号2) | |

遺物一覧（観察）表

土器観察表

掲載 番号	掲載遺構	種別	器種	計測値 (cm)			色調 (外面)	形態・手法の特徴など	備考	実測 番号
				口径	底径	器高				
1	側溝 1	須恵器	平瓶	-	-	-	灰白(N7/)	内面：ナデ 外面：ヘラケズリ		58
2	包含層	弥生土器	壺	-	-	-	にぶい黄橙(10YR6/3)	沈線：3条、 円形浮文2個		24
3		弥生土器	甕	-	-	-	灰黄褐(10YR6/2)	口縁部：ヨコナデ 内面：ナデ		44
4		土師器	甕	-	-	-	灰黄(2.5Y7/2)	口縁部：ヨコナデ 内・外面：ナデ		39
5		土師器	椀	-	-	-	にぶい黄橙(10YR6/3)	内・外面：ナデ、ヘラ ミガキ		35
6		須恵器	杯	12.1	7.0	3.1	灰(N6/)	内・外面：ヨコナデ		57
7		須恵器	杯	13.4	10.1	3.8	灰(N6/)	内・外面：ヨコナデ		53
8		須恵器	椀	-	9.2	-	黄灰(2.5Y5/1)			51
9		須恵器	壺	-	7.1	-	灰(5Y6/1)	内面：ヨコナデ 外面：ナデ		26
10		勝間田焼	壺	-	-	-	灰(N5/)	内・外面：ヨコナデ		31
11		勝間田焼	皿	-	-	-	灰白(N7/)	内・外面：ヨコナデ		17
12		勝間田焼	皿	13.5	-	-	灰(7.5Y6/1)	内・外面：ヨコナデ		33
13		勝間田焼	椀	10.0	-	-	灰白(10Y7/1)	内・外面：ヨコナデ		4
14		勝間田焼	椀	-	3.45	-	灰白(N7/)	内・外面：ヨコナデ 底部：糸切り		16
15		勝間田焼	椀	-	5.65	-	黄灰(2.5Y6/1)	内・外面：ヨコナデ 底部：糸切り		14
16		勝間田焼	椀	-	5.9	-	灰(N6/)	内・外面：ヨコナデ 底部：糸切り		13
17		勝間田焼	椀	-	5.7	-	灰(7.5Y6/1)	内・外面：ヨコナデ 底部：糸切り		49
18		勝間田焼	椀	-	5.2	-	灰(N6/)	内・外面：ヨコナデ 底部：糸切り		2
19		勝間田焼	椀	-	4.8	-	灰白(N7/)	内・外面：ヨコナデ 底部：糸切り		48
20		勝間田焼	椀	-	5.75	-	灰白(2.5Y7/1)	内・外面：ヨコナデ 底部：糸切り		1
21		勝間田焼	椀	-	7.7	-	灰(N5/)	内・外面：ヨコナデ 底部：糸切り		36
22		勝間田焼	椀	-	6.4	-	灰白(N7/)	内・外面：ヨコナデ 底部：糸切り		15
23		勝間田焼	椀	-	6.0	-	灰(N6/)	内・外面：ヨコナデ 底部：糸切り		47
24		勝間田焼	椀	-	8.4	-	灰黄(2.5Y7/2)	内・外面：ヨコナデ 底部：糸切り		46
25		勝間田焼	椀	-	5.6	-	灰(N6/)	内・外面：ヨコナデ 底部：糸切り		28
26		勝間田焼	椀	-	5.4	-	灰(N6/)	底部：糸切り、内面： 重ね焼きの高台部付着		27
27		勝間田焼	壺	-	5.2	-	灰白(N7/)	内・外面：ヨコナデ 底部：糸切り		3
28		勝間田焼	甕	-	-	-	灰(N5/)	外面：格子目タタキ		54
29		勝間田焼	甕	-	-	-	灰白(2.5Y8/1)	外面：格子目タタキ		52
30	東播系須恵器	捏ね鉢	-	(18.0)	-	灰(10Y6/1)	内面：ヨコナデ 外面：ナデ		18	
31	土師器	鍋	-	-	-	灰黄(2.5Y7/2)	口縁部：ヨコナデ		50	
32	土師器	羽釜	-	-	-	灰白(2.5Y7/1)	内・外面：ヨコナデ		30	
33	土師器	羽釜	-	-	-	灰黄(2.5Y7/2)	内・外面：ナデ		25	
34	土師器	小皿	9.3	5.6	2.2	にぶい黄橙(10YR7/3)	内・外面：ヨコナデ 底部：糸切り		37	
35	土師器	小皿	8.8	6.4	1.45	灰黄(2.5Y6/2)	内・外面：ヨコナデ 底部：糸切り		29	
36	土師器	小皿	9.4	7.6	1.7	灰黄(2.5Y7/2)	内・外面：ヨコナデ 底部：糸切り		42	

掲載番号	掲載遺構	種別	器種	計測値 (cm)			色調 (外面)	形態・手法の特徴など	備考	実測番号
				口径	底径	器高				
37	包含層	土師器	椀	-	6.05	-	にぶい褐(7.5YR5/4)	内・外面：ナデ 底部：糸切り		41
38		白磁	碗	15.2	-	-	露：灰白(N8/)	内・外面：施釉		34
39		青磁	碗	(14.9)	-	-	露：灰白(7.5Y7/1)	内・外面：施釉		12
40		青磁	碗	-	-	-	露：灰白(7.5Y7/1)	内・外面：施釉		55
41		青磁	碗	-	4.8	-	露：明オリーブ灰 (2.5GY7/1)	内面：施釉		6
42		青磁	碗	-	5.45	-	露：灰白(5Y7/1)	内面：施釉 外面：ケズリ		11
43		青白磁	碗	-	4.7	-	露：白	内面：蛇の目釉剥ぎ		56
44		瓦質土器	羽釜	-	-	-	暗灰(N3/)	口縁部：ヨコナデ 内・外面：ナデ		38
45		瓦質土器	羽釜	23.0	-	-	灰白(2.5Y7/1)	口縁部：ヨコナデ 内・外面：ナデ		40
46		備前焼	甕	-	-	-	灰(5Y6/1)	内・外面：ヨコナデ		21
47		備前焼	甕	-	16.6	-	にぶい黄橙(10YR6/3)	内・外面：ナデ		19
48		備前焼	播鉢	23.6	-	-	黄灰(2.5Y5/1)	卸目単位8本		20
49		備前焼	播鉢	(29.7)	-	-	赤灰(2.5YR4/1)			43
50		備前焼	播鉢	-	16.5	-	赤褐(10R4/3)	卸目単位10本		5
51		備前焼	播鉢	-	14.0	-	灰(10Y5/1)	卸目単位5本		45

金属器観察表

掲載番号	掲載遺構	器種	材質	計測値 (mm)				重量 (g)	備考	実測番号
				最大長	最大幅	最大厚	最大径			
M 1	包含層	釘	鉄	68.8	6.0	6.8		4.25		3
M 2		馬鍬の歯	鉄	173.2	24.0	13.1		109.89		2
M 3		刀子	鉄	135.2	17.8	6.3		14.57	茎部分に木質残存	1

石器・石製品観察表

掲載番号	掲載遺構	器種	計測値 (mm)				重量 (g)	石材	備考	実測番号
			最大長	最大幅	最大厚	最大径				
S 1	包含層	環状石斧	-	-	33.8	-	99.79	石英安山岩	1/4残存	2
S 2		R F	46.5	49.3	11.6	-	24.97	石英安山岩		1

土製品観察表

掲載番号	掲載遺構	器種	計測値 (mm)				重量 (g)	色調	焼成	備考	実測番号
			最大長	最大幅	最大厚	孔径					
C 1	包含層	土錘	46.3	10.7	-	3.3	4.53	にぶい黄橙(10YR7/3)	良好		土3
C 2		土錘	51.0	14.0	-	4.0	9.14	黄灰(2.5Y6/1)	良好		土1
C 3		土錘	(49.2)	12.9	-	4.1	7.41	灰黄(2.5Y7/2)	良好		土2
C 4		土錘	(31.1)	12.2	-	4.0	3.25	黒(5Y2/1)	良好		土4

木製品観察表

掲載番号	掲載遺構	器種	計測値 (cm)			備考	実測番号
			最大長	最大幅	最大厚		
W 1	包含層	糸まき	3.60	3.18	2.33		1
W 2		不明	6.66	3.13	1.43		2

1 確認調査
トレンチ全景
(北西から)



2 トレンチ1
(南西から)



3 トレンチ2
(北西から)



図版2



1 調査前風景
(北西から)



2 調査区全景
(北西から)



3 調査区全景
(南東から)

1 柱穴列1・2
(北東から)



2 側溝2北壁側断面
(南東から)



3 側溝2中央部断面
(南東から)



図版 4



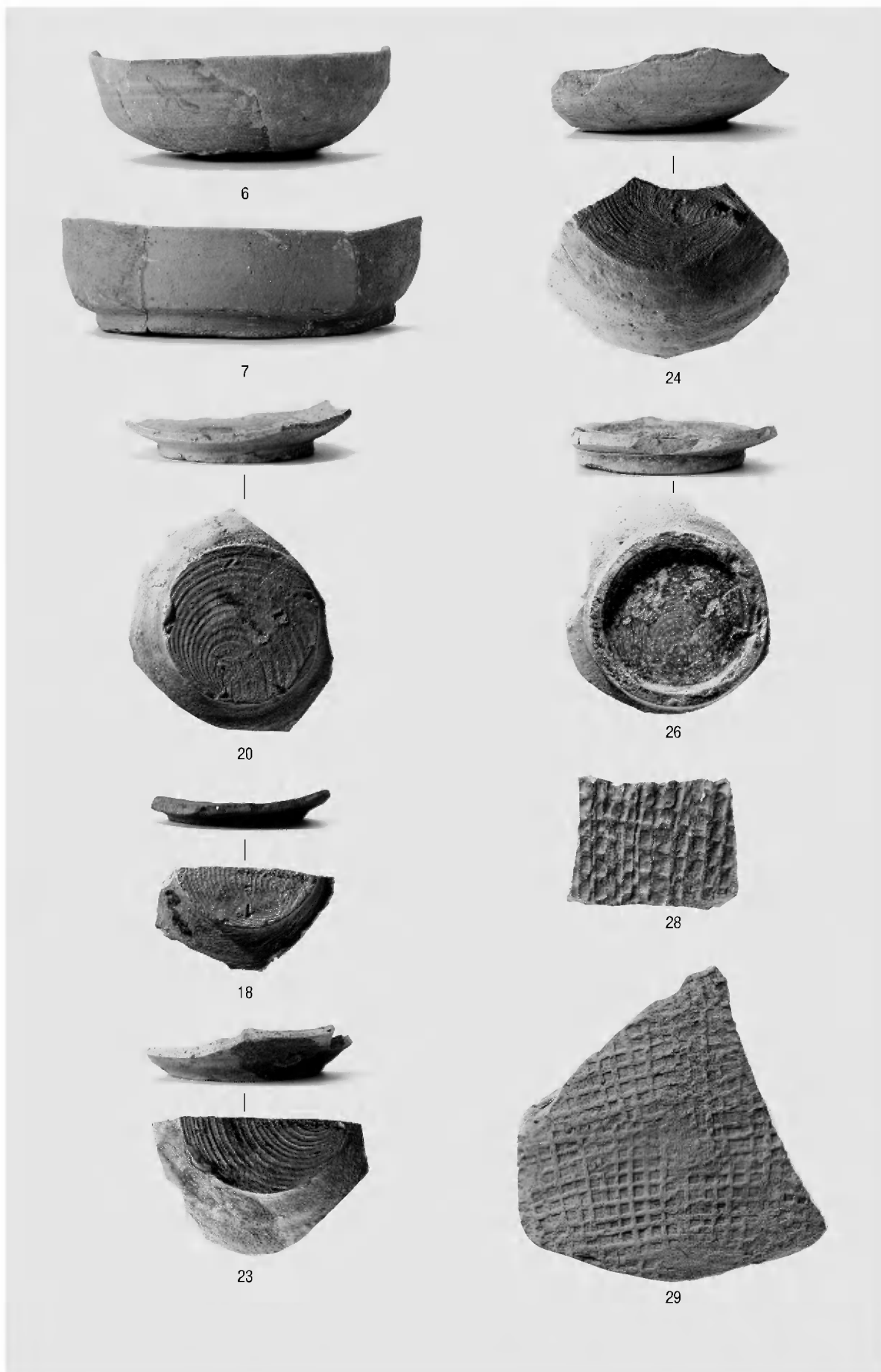
1 側溝 1・3
中央部断面
(南東から)



2 調査区北壁断面
(南から)

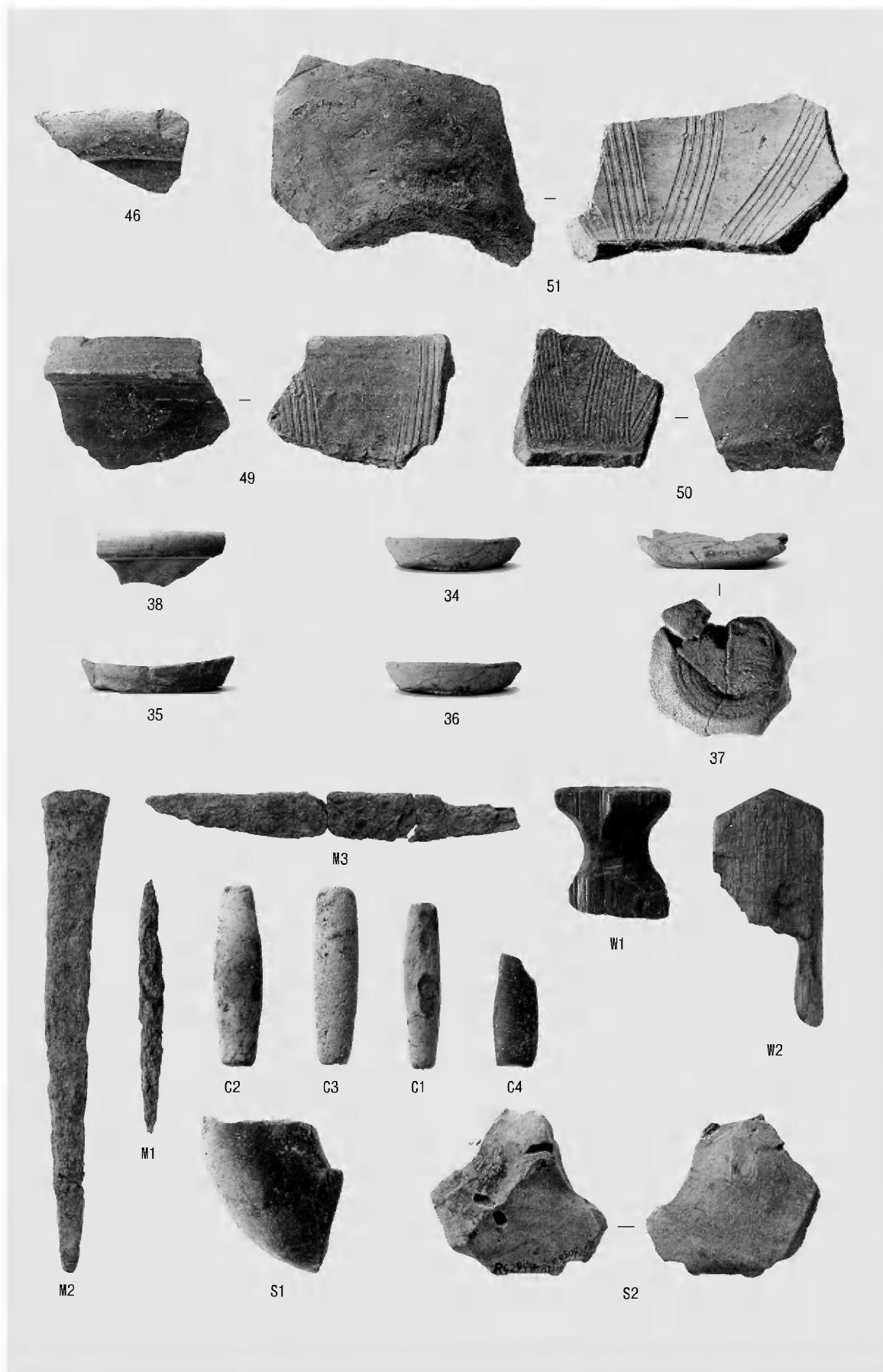


3 調査区南北断面
(東から)



包含層出土遺物①

图版 6



包含層出土遺物②

報告書抄録

ふりがな	なかまちびいいせき							
書名	中町B遺跡							
副書名	一般国道429号特殊改良1種に伴う発掘調査							
巻次								
シリーズ名	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告							
シリーズ番号	204							
編著者名	小嶋善邦・平井泰男・大橋雅也							
編集機関	岡山県古代吉備文化財センター							
所在地	〒701-0136 岡山県岡山市西花尻1325-3 TEL 086-293-3211							
発行年月日	2007年2月28日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積	調査原因
なかまちびいいせき 中町B遺跡	おかやまけん 岡山県 みまさかし 美作市 なかまち 中町 53-1ほか	33215	336410029	35° 06' 28"	134° 19' 40"	20050401～ 20050531	632㎡	一般国道 429号特殊 改良1種
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
中町B遺跡	集落	平安時代		道路遺構 1 柱穴列 2 土壌 1 溝 1		須恵器 土師器 金属器 木器		古代因幡道を検出
要約	<p>本書は一般国道429号特殊改良1種に伴って発掘調査を実施した、中町B遺跡の報告書である。遺跡は美作市中町に所在し、吉野川左岸の河岸段丘上に立地している。当センターが「中国横断自動車道姫路鳥取線（鳥取自動車道）建設に伴う発掘調査」で実施した中町B遺跡の北東側に位置している。</p> <p>調査の結果、3条の側溝とその間に挟まれた幅5～6mを測る平坦面から構成される道路遺構と、この道路遺構に直交する2条の柱穴列等が確認された。道路遺構は、出土遺物等から古代因幡道と想定される。遺物は弥生時代から近世にかけての土器・金属器・木器等が出土している。</p>							

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 204

中町 B 遺跡

一般国道429号特殊改良1種に伴う発掘調査

平成19年2月28日 印刷

平成19年2月28日 発行

編集 岡山県古代吉備文化財センター
岡山市西花尻1325-3

発行 岡山県教育委員会
岡山市内山下2-4-6

印刷 山陽印刷株式会社
岡山市富吉3098-1



本文用紙は古紙配合率100%再生紙を使用しています